◆リヨン風信（十五）

飛翔

中川莉羅

気が付けば年が明けていた。二〇二〇年の幕開けは、私にとってそうとしか言えないような日々だった。学業論文の締め切りに終われていたため、残念ながら今年の冬休みは帰国出来ずじまいだった。クリスマスや新年を友人達と楽しく迎えたものの、頭の中は常に論文のことで一杯で、己の怠惰と闘いながら言語力・知識不足をカバーするのに必死の日々であった。

フランスの教育機関では、十月頃に新学期が始まり、二週間ほどの冬休みを挟み、一月に前期が一旦修了となる。二月から六月までが後期となり、その後は長い夏休みとなる。リヨン・カトリック大学では、冬休み明けに論文を提出し、続いて学期末テストと口頭諮問が行われる。母国に帰国していた学生達がぞろぞろとフランスに戻り、唇をきっと結んで試験にとりかかる。闘いの季節である。

論文の内容は自由選択である。英語とフランス語の比較を通しての二か国語教育論や、エコロジーを意識した新しい建築法、フランス文学における友情論、タイとフランスの労働スタイルの違い、フランスにおけるイスラム文化など、様々なテーマが飛び出した。私はと言うと、昨年度の口頭発表で俳句について調べたことをきっかけにさらにこのテーマを追求してみたいと思い、僭越ながら「フランス語で書かれた新俳句の飛躍」というテーマで論文を書かせていただいた。

ユネスコの世界遺産無形文化財への登録が待たれる中、俳句は世界中で注目を集めている。フランスでは一九〇三年に初のフランス語による句集が匿名で発行され、その後連句の形で書かれた句集がポール・ルイ・クシュー氏らによって発行された。第二次世界大戦中、俳句に対する興味は一時的に薄れてしまったものの、二〇〇〇年には再び日本文化ブームが巻き起こる。その波に乗って俳句も今では「禅の国日本の文化」としてすっかり有名になった。フランスの哲学者ロラ

ン・バルトは、生前日本文化に並々ならぬ関心を寄せており、日本への滞在経験もあったという。これを踏まえて打ち立てられた俳句論はなかなかに興味深い。氏曰く、「俳句とは今現在に生きる術である」と。氏はまた西洋文化と日本文化の比較についてこうも言う。「西洋文化では、キリスト教の権力者が制圧的に国民に洗礼を課するが如く、あらゆる事物を意味論で埋め尽くす。一方、俳句は言葉によって挑発するのではなく、むしろ言葉を制限することによって意味を生み出す」と。逆説的ではあるが、十七文字という字数制限があるからこそ、俳人たちは自由に創造性の翼を羽ばたかせることが出来るのだと言う。

日本文化は「引き算の美学」に価値を置くと言われる。必要以上の華美を厭い、研ぎ澄まされた自然の美や儚さが好まれる。西洋のフラワーアレンジメントでは空間を埋め尽くす如く花瓶一杯に花をあしらうのに対し、生け花では余分なものをそぎ落として空間における花の存在感を表すことに主眼が置かれる。いわば一見何もない「余白」の部分に創造性の余地があり、「空」や「無」はまったくのゼロではなく、無限の可能性を孕んだものとして受け止められる。このような日本人の美学に惹かれるフランス人は少なくない。「禅」は今や世界共通語になりつつあるとさえ言える。また文芸評論家の山本健吉氏が「俳句は滑稽なり。俳句は挨拶なり。俳句は即興なり」と言われる通り、俳句は単なる文学の一形態をはるかに超えて日本人の精神性、社会性に深く根付いていると思われる。これらのことを、あちこちに道草をしながら進んでは戻り、またあちこちの資料をひっくり返しては戻り、を繰り返しながらたどたどしく書き進めていった。

論文の提出が終わると、次には口頭試問が待ち構えている。当日、クラス担当の先生二人に加え、学長自ら出向いて私達のクラスに参加してくださった。学長といっても権威的なところの一つもない気さくなお人柄で、笑顔の優しい穏やかな印象の方である。しかし先生方のお優しいお人柄にも関わらず、容赦なく質問が繰り出され、学生達はあらゆる語学力や知識を総動員して質疑に答えなければならない。緊張の瞬間である。一人の発表が終われば、クラスメート全員でその労をねぎらい、次の順番を待つ者には励ましの声をかける。クラスの結束がこうして徐々に強まっていった。

さて、ついに私の番が来た。たどたどしい口頭発表の後、先生方の質問に答える。曰く、元々の言語の構造上フランス語は句作に不向きなのではないか。例えば俳句では主語である「私」は明示されないのが常であるが、フランス語文法においては主語の省略はありえない。俳句では「私」の生々しい感情や思考を声高に訴えることをせず、自然の描写を通して感情を昇華することが尊いとされ、いわば「世界を見つめる透明な眼」として「私」が存在する。これに対し、西洋文化ではデカルトの「我思う故に我在り」に代表される通り、「私」なしに世界を語ることは不可能である。これらのことを踏まえた上で句作に向く言語が日本語以外にあるとすれば、それはどのような言語であるか。あるいは、これまでの日本社会において政治的意図を込めて俳句がなんらかのプロパガンダとして「悪用」されたことはあったか。はたまた俳句は自然の儚き美を描写するものでありながら、江戸時代の俳句が後世にまで引き継がれるのは一見矛盾しているように思われるが、これをどう説明するか、等々、思いもよらなかった方向から質問が寄せられ、戸惑いながらもさらなる思索のきっかけを与えられたようにも思った。

口頭試問の最終日、担当の先生のはからいで学生達全員にクロワッサンがふるまわれた。チョコレートのぎっしり詰まったパン・オ・ショコラを頬張りつつ、ただ無暗に厳しい課題を学生達に与えるのではなく、こうしてきちんと労ってくださる先生方にフランス人の懐の広さを感じた。学長は「みなさん、明日までに俳句を書いてくること！宿題ですよ！」と茶目っ気のあるコメントを残して去って行かれた。

フランス式の教育に曲がりなりにも触れて思うことは、物事を多角的に見つめる批判精神を養う機会を与えていただけるということである。日本社会では、波風を立てないように、異を唱えないように、常に他者と足並みを揃える調和の精神が求められる。こうした社会で、優しく温かい人々に守ら

れ、これまで平和に生きてこられたと思う。しかしフランス社会では、「ノン」と言わなければならない場面も多々ある。移民問題やストライキ、政治不信など幼いころから社会の闇を見て育つフランス人は批判精神を養わずには生きていかれない。たかだか十歳くらいの子どもが小学校で日々暴力の現場に出くわす。納得できないものには断固として闘い、権利は自ら勝ち取るものである、というのがフランス革命以来の国民の精神であり、今日でも脈々と受け継がれているものだと思う。こうした社会に多少なりとも触れる中で、これまでの人生で形作られてきたのっぺりとした牧歌的な私の心象風景に、ほんの少し陰影と奥行きを与えられたように思う。

ローヌ河を渡る鷗の群れや、紫色とオレンジ色の微妙なグラデーションを描く朝焼けをやっと心から美しいと思える日々が戻ってきた。「俳句とは今この瞬間にも移り変わりゆく儚い美を描くこと」であると、論文に書いておきながら、果たして私自身は「今に生きている」のだろうか。そのようなことを考えながらリヨンの一月は過ぎていくのであった。

◆リヨン風信(十四)◆

ひかりの街

中川莉羅

今年もまた、「光の祭典」(la Fête des Lumières)の季節がやって来た。光の祭典とは、毎年十二月八日前後の週末を含む四日間にかけて、リヨンで大々的に行われるイルミネーションのスペクタクルである。恋人との約束を控えた若い娘のように、十一月末頃から街は急に色めきだす。通りの店はクリスマスのオーナメントで飾られ、街路樹は淡い光の粒を身にまとって道行く人々を優しく見守る。ベルクール広場には大観覧車が設営され、ペラッシュ広場のクリスマス・マーケットではシナモンクッキーの甘い香りが漂い始める。

元々、光の祭典は聖母マリア信仰に由来する伝統行事であった。十四世紀の欧州でのペストの流行の際、リヨンの住民がマリア像に祈りを捧げたところ、ペストが治まったことに由来するという説。あるいは、フルヴィエールの丘の大聖堂のマリア像の完成記念日が光の祭典の起源であるなど、諸説ある。いずれにせよ、十二月八日がリヨンの住民にとって特別な意味を持つ日であることは間違いない。

しかし、今年のフェスティバルの前日にはフランス全土で大規模なストライキが行われ、国中が大混乱に見舞われた。フランス大統領エマニュエル・マクロンの打ち出した年金政策に反対してのことであった。公共機関は閉鎖され、フランス市民の多くは交通手段を失い、教育機関は一時的に休校となった。これを受けて光の祭典の開催が危ぶまれていたが、今年もなんとか無事に行われた。

昨年度のちょうど今頃、フランス北東部に位置するアルザス地方の中心都市ストラスブールのクリスマス・マーケットがテロリズムの攻撃にさらされた。リヨンに留学する前はストラスブールに一年ほど滞在していたことがあり、このニュースに強くショックを受けたのを覚えている。さすがに今年は中止されるものかと思われたが、街はまた毎年のように営みを繰り返すようだ。

現在勤務している日本語学校の生徒さんの中にストラスブール出身の方がいらっしゃるのだが、幸いにして近親者の方

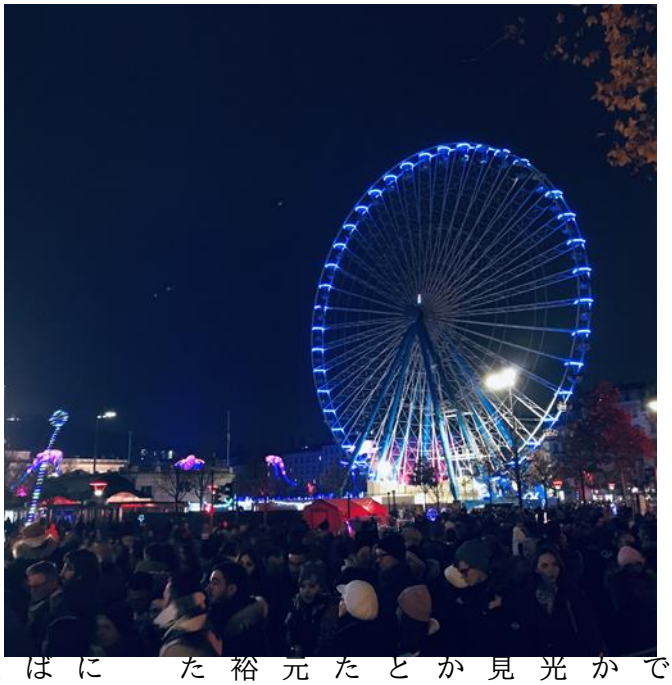
リヨンの街は、幸いにしてテロリズムの脅威にさらされてはいない。しかしストライキの影響か、街の空気は心なしかどこか殺伐としているようだ。大部分の人々は、おそらく日々を一生懸命に生きて、愛する人々を守るために働き、今日も無事に家に帰りたいと願っている普通の人々であると思う。こんなにも不安定で脅威に満ちた世界に生きていること自体が、すでに奇跡なのかもしれない。

私はと言えば、ちょうどコルシカ島に旅行していた友人と、もう一人のリヨン在住の友人と集まって、この一大行事を観に行った。コルシカ島からの帰りのバスがストライキのため運行中止となり、一時は友人の参加が危ぶまれたが、なんとか私営バスを乗り継いでリヨンまで来てくれた。旧市街地でイルミネーションを見ながら通りのスタンドでアペリティフや牡蠣をつまみ、久々の再会を祝った。

地元の人々にとって光の祭典はどのような意味を持つのだろうか。どんなに荘厳な光のスペクタクルも、見慣れてしまえば価値を失うものなのかもしれない。リヨン滞在二年目とはいえまだまだ観光客気分の抜けない私は、大音量のスペクタクルを尻目に飲み食いとおしゃべりを続ける友人達の様子になんだかそわそわしてしまう。腹ごなしがてらの散歩ついに被害はなかったという。大変でしたねと言うと、その方は静かに微笑みながらこうおっしゃった。

「人生は残念ながら静かな河ではありません。時に悲劇が起こり、それに伴う混乱や苦しみもあります。それでも、そこで立ち止まってしまったら何もなくなってしまいます。喪に服す時間ももちろん必要だけれど、そこからまた立ち直って前に進まなくてはならないのです」

ストラスブールの住民たちにクリスマス・マーケットの開催を決意させたのは、単なる地元への愛着心やお祭り騒ぎを求める陽気な精神ではない。フランス人のしたたかさと情熱、また明日も生きようとする静かな覚悟を感じた。



でに、せっかくだから光の祭典を見ておこうかと、やっと腰を上げた彼らに地元住民の余裕を感じた。

地元の人に言わせれば、ほんの数十年前までは光の祭典はごく質素なものだったという。十二月八日の当日、各家庭の窓辺にロウソクを灯し、聖女に祈りを捧げるささやかな一日だったのだそうだ。今のような街をあげての祭りとなったのは一九九九年のこと。二〇〇〇年の幕開け間近となったその日から盛大なライトアップが行われるようになった。宗教的な意味合いが失われ、商業的な華々しさのみが追及されるようになったことを嘆く人々もいる。

「昔の質素なスタイルの方が良かった。これじゃ、まるでディズニーランドだ」

「なんていう人混みだ！来年はもう絶対に行かないぞ」などとぶつぶつ言う友人達とともに、大勢の人々に流されるようにフルヴィエールの丘を目指した。

日本人にとってのお花見のようなものであろうか。毎年同じように華々しく喧伝され、慌ただしくやって来ては去る季節。人波にもまれて疲れ果てて帰ってくる羽目になるとしても「どうせ毎年見ているから」では済まされないような、どうしてもその場所に行ってこの目で見て確かめないといけないような気にさせる、迫力のある美しさだ。

空中を遊泳する巨大なクジラの群れのような光のパレード。

街中を彩る鬼灯の形をした色とりどりのランプ。

あちこちで飛び交う「ショー、ショー、マロン・ショー！」（熱々の焼き栗！）の掛け声。

香水の香り、異なる言語、ぶつかり、絡まり合う様々な国籍の人々の視線。

あまりの人の多さに、急ぎ足で帰りながらベルクール広場の幻想的な光のスペクタクルをカメラに収めるのが精いっぱいだったが、それでも胸を明るく照らすような清らかな感情が残った。

光の祭典という一大行事を終えたリヨンの街は、心なしか少し肩の力を抜いたように思える。世界中の楽団を招いて迎えるニューイヤーコンサートのような華やかさが光の祭典だとすると、クリスマスはさながらアーティストたちが極秘で行うプライベートパーティーのようなものだと思う。見慣れた故郷への道をのんびりと辿るような、プレゼントを小脇に抱えて大切な人に会いに行くような、静かな愛おしさに包まれる時間である。

クリスマスは商業的過ぎるから、華々しいイルミネーションなどすべて取り去り質素に過ごすべきだという人々もいる。光の祭典が終わると同時に、思い出したかのように突然流れ出すクリスマスソングは、確かに滑稽に感じられるかもしれない。人々は追い立てられるようにプレゼントを買い、サンタクロースは一日だけ奇跡を行って慌ただしく去る。おもちゃは家の片隅に姿を消し、子供達はプレゼントをもらったことさえいつか忘れてしまう。夢を見ないことをはじめから選択していれば、傷つかずに済むのかもしれない。

しかし私はこうした営みを人間の知恵と呼びたいと思う。夜の街に太陽を出現させることは人間には出来ないけれど、闇に色をつけることは出来る。冷たい北風が吹いても、ランプを灯し、家を温かく整え、美味しいスープを用意することは出来る。なんとか明日も生きていくために。希望の灯を絶やさないように。大人になった私達はサンタクロースを信じることは出来ない。明日は何を信じて生きていけばいいのだろう。答えの出ないまま、リヨンの冬は今年も静かに過ぎてゆくのであった。

◆リヨン風信（十三）『ルネサンス』◆

中川　莉羅

十一月十四日、リヨンで今年初の雪が降った。みぞれが少し降ったばかりで積もらなかったが、四十度を超える猛暑の日々を思うと、季節の移り変わりの早さに驚くほかない。街のそこかしこに焼き栗を売る小さな赤い車が現れ、通りの店では早くもクリスマス用のチョコレートが出回っている。ペラッシュ駅の広場では毎年恒例のクリスマス・マーケットの準備が始まろうとしている。

そんな折、作家のワリッド・ナジム氏にお会いする機会を得た。リヨンの街に隠された秘密、特にサン・クレール教会の地下堂アレット・ド・ポワソンに関する研究で有名な方である。大学の授業の一環でインタビュービデオを拝見して以来、このテーマについて興味を抱いていたが、まさか実際にお会いすることが出来るとは思ってもみなかった。大柄な体躯、いつでも微笑みをたたえているような柔和なお顔、それでいて眼鏡の奥に光る知性の輝きが印象的な方である。著名な作家の方を前にして緊張していた私に、友達と話すように気軽に接してくださり、些細な質問の一つひとつにも大変丁寧に回答してくださった。

リヨン商工会議所の本部のあるパレ・ド・ラ・ブルスにてお会いしたのだが、「商工会議所」という事務的な響きとはほど遠い宮殿のようなこの建物は、日頃は一般公開されておらず、ワインの試飲会など特別な催し物のある日に限り門戸が開かれるという。大学への通り道で何度もこの建物の前を通り過ぎていたが、中に入るのは初めてだった。

一四六三年にルイ十一世が大規模な交易市を開いて以来、リヨンはフランスで初めて商事裁判権を獲得したという。二〇一九年の今日でもなお、この建物はかつての栄華の面影を残している。ホールの天井に描かれた天使たちに見守られながら、人々は思い思いに時間を過ごしている。飛び交うフランス語が柔らかく反響する様は、かつての交易の様子を思わせた。

ギリシャ神話のような美しい四体の女神像のあるホールでナジム氏の饒舌な説明に耳を傾ける。四体の女神像は、それぞれ火、水、風、土を象徴しているという。この四元素は古代ギリシア・ローマ、イスラーム世界、および十八〜十九世紀頃までのヨーロッパで支持され、古代インドにも同様の考え方が見られると言われている。四元素の解釈は時代や国の背景により異なるが、季節になぞらえるなら、軽々とした春は風、情熱的な夏は火、豊饒な大地の実りを表す秋、そして冷たく大地を凍らせる冬は水ということになる。また、スイスの心理学者ユングによると、火は直観を、水は感情を、風は思考を、土は情感や感覚を象徴するという。これらの四元素は宇宙の成り立ちと調和に必要不可欠な要素であり、四元素の乱れは世界に混沌を生み出す。

ゼウスの反対を押し切り、天界の火を盗んで人類に与えたプロメテウスに象徴されるように、火は人類が踏み出した「知」への最初のアプローチであるが、同時にそれは厳しく罰せられる。神から与えられた自然の恵を享受するだけでは飽き足らず、自ら火を求めた人間は強欲なのだろうか。現代の私達の社会では、水はただ水道の蛇口をひねれば出てくるし、マッチを擦ればキャンドルに火をともすことが出来る。文明は人類の歴史の発展を大いに飛躍させたが、同時に「人間が自然を飼いならせる」という錯覚を与えたのかもしれない。

ナジム氏との会話で、「人間にとっての進歩の鍵は理解することである」というテーマについて話したのだが、ここに大きな矛盾が存在するように思えてならない。なぜなら、この世界で起こることについて意識的であればあるほど、苦しみや不幸にも気づかざるを得ないからである。人間にとっておそらく一

番の不幸は、テロリズムや移民問題、経済不況など外側の状況にあるのではなく、自らの内側に無理解、絶望、癒しきれない悲しみを見出すことではないだろうか。

それでも私達の内側に燃え盛る炎を消すことは出来ないし、涙となって溢れ出る水は枯れることがない。風のように軽々と駆け回る心も誰もが子供の頃に持っていたし、人は大地から離れて生きることは出来ない。こうしたことのすべてを理解したふりをして、自らの内にある自然を「飼いならす」ことは、成熟することとは違う。こんなにも身近にあるものを真の意味で理解するのは、シンプルなようでいて難しい。

日本文化に対しても強い興味を抱いていらっしゃるというナジム氏は、禅や武士道、神道といった古き良き日本文化に「未知のノスタルジー」を感じているようだ。「未知の」というのは、氏は未だ日本を訪れたことがなく、主に書物や研究を通じて日本を「旅している」からである。そこに懐かしさの入り混じった親近感を抱くとしても不思議ではないかもしれない。私達の魂は、必ずしも生まれ育った時代や文化や国に共感するとは限らない。時には居場所を求め、苦しみさまよい、時代の先駆者が辿ったどこかまったく違う道のりに安寧を見出すこともある。

『理想の場所はどこか彼方にあるのだろうか？』

これはある航空会社の看板広告に書かれていたキャッチコピーなのだが、一考に値する文だと思う。私達は自国の美しさを自分自身では知ることができない。だからこそ外国の文化に触れ、他者との交流を必要とする。この他者性を通してしか自らを知ることができないとは、なんという矛盾だろう。しかし同時に、それはなんと美しい冒険だろう！

商工会議所を後にして、私達はレストランで軽い夕食をとった。「完璧な卵」という名前の通り、それは本当にとろけるほどおいしい半熟卵とキノコの料理だった。

「人間の成長はらせん状に続く」とナジム氏は言う。

「今、ここで起こっていることを完全に理解できなくても、人はそれなりのペースで進歩する。そう、ちょうど階段を上るように。遅かれ早かれ、人は成長する。ぐるぐる円を描きながらね。円は完結するのではなく、上昇しながら進化していく。そして進化には終わりがないんだ」

もしそうだとしたら、幼い子供がよちよち歩きをしながら歩き方を覚えるように、大人である私達もゆっくり進めばいいのではないだろうか。

ローヌ河を渡りながら、輝くばかりに美しい夜景に目を奪われた。そして、学校や仕事の帰り道、疲れてイライラしながら急いでこの道を通り過ぎている自分を少し恥ずかしく思った。世界は何一つ変わっていないし、ローヌ河の色も街並みも昨日と同じままだけれど、私の目は何か新しいものを発見したかのようだった。それとも氏の言うように、「目は同じままだけれど、世界への視線が変わった」のだろうか。

「今、この瞬間に生きる」とは、あらゆる可能性に対してオープンであること、世界の美しさに驚嘆し続けること、生き生きとした魂を持ち続けること。一見単純に見えるこのフレーズは、大人にとっては至難の業である。私達は過去のことを思い煩ったり、未来のことを心配したりしてしょっちゅう「タイムスリップ」してしまう。あるいは新しい可能性に対してかたくなにドアを閉ざし、本音を偽り、空しい笑顔を見せあう仮面パーティーの世界で生きている。それでもいつの日か、ルネサンスは可能なのだろうか。ひなが卵の殻を割って外の世界に出るように、私達も再びこの世界に生まれることが出来るのだろうか。挑戦は続く。

◆リヨン風信（十二）◆

リヨンの守り神

中川莉羅

猛暑の反動だろうか、今年の十月はよく雨が降るように思う。ダウンジャケットに身を包み、足早に道を行く人々の姿を見かける。ホットココアが恋しくなる季節である。

早いもので、リヨンに着いてから一年が過ぎた。大学での学業を続ける傍ら日本語学校での授業を担当し、そして別の会社との契約でフリーランスで翻訳作業を行う。「本業」と呼べるものが何なのか我ながら分からない。強いて言えば、頼まれればどこにでも馳せ参じる「何でも屋」といったところだろうか。

無数の紙切れ、新しく出会う人々の沢山の顔、フランス語と日本語の言葉のシャワーに紛れ、細切れの時間の中に私は存在している。女なのか男なのか、人間なのか動物なのかさえ定かではなくなり、かろうじて「生物」として生き延びている。夜には名前も記憶も失ってただ溶けるように眠る。そのような日々が続いていた。

そんなある日、仕事への途中で三人のフランス人グループに話しかけられた。

「日本人の方ですか？」と上手な日本語で話しかけてくださったグループの中のその女性は、長年日本語を勉強しており、ご主人様と一緒に日本に旅行されたこともあるという。自己紹介や雑談などをして、その場はそこで別れた。

忙しく日々を過ごす中で彼らのことを忘れかけていたある日、ふとその女性から連絡があった。

「あなたに紹介したい日本人の女性がいるんだけれど、会わない？」と。リヨンで日本人の方とお会いする機会があまりなかったこともあり、喜んでお会いすることにした。

街中の小さなカフェで彼女たちと会った。パリ、そしてメキシコでの滞在のご経験もあるというその日本人の女性はとても流暢なフランス語を話される。先日のフランス人女性と、その日本人女性は長年の友人らしい。彼女たちは敬虔なクリスチャンであり、仕事の合間を縫ってボランティア活動を行っているという。街角に佇み、聖書の布教活動を行っている人々をここリヨンでもよく見かけるが、暑さや寒さにもめげず、立派な人々だと思っていたものである。しかし、素顔の彼女たちは盲信的な信者というわけではなく、「マロン・ラテにしようかココアにしようか」といった可愛らしいことで悩んでいる、ごく普通の人々である。

私自身は熱心なクリスチャンとは言い難いのだが、キリスト教の教育を受けて育ったということと、その時携わっていた翻訳の仕事がサンティアゴ巡礼路に関するものだったということもあり、彼女たちの話は興味深かった。

「聖書というのは、人間の取扱説明書のようなものだと思うの」とその日本人女性は言う。

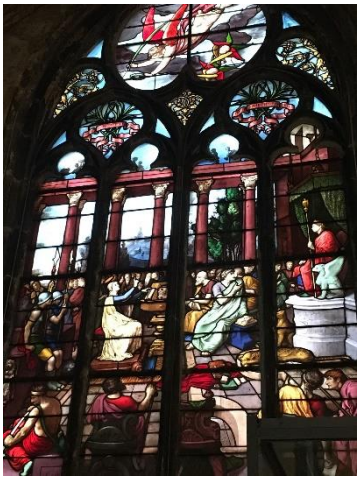
「神様が人間を造ったのなら、どのように人間が機能するのかご存知のはずだわ。人類の誕生以来、テクノロジーは進化したかもしれないけれど、人間の本質はそれほど変わっ

ていないんじゃないかしら。私達は相変わらず無知で、時におろおろと泣き、時にささやかな歓びを見つけながら手探りで生きている。聖書が長い歴史の中で常に『ベストセラー』なのは、私達が求めている答えがそこにあるからではないかしら」と。

「取扱説明書」という実利的な説明の仕方が気に入った。夕方の明るい光の中で彼女たちと別れた。日々の雑務に追われて氷のようになっていた心が、まばゆい光の中で溶けていくように思った。

キリスト教のイメージの強いフランスだが、実際は政教分離国家である。信教の自由は各人に認められるが、それはあくまでプライベートの領域にとどめておくべきことであるというのがフランス国家の主張である。その思想に基づいて、二〇〇四年の法律制定以降、宗教的なモチーフを公共の場で身に着けることは禁止されている。

例えば、イスラム社会では女性が近親者以外の人に自らの顔を晒すことがタブーとされており、女性は頭から爪先まで体を隠す服装をする。こうした女性たちがフランス社会に生きる場合、ベールを脱ぐことは屈辱なのか、解放なのか。労働時間中にベールを脱ぐことを拒否した女性従業員を解雇したフランスのある企業が先日起訴された。「社内規則に明記されていないにも関わらず、正当な理由なく個人の自由を侵害した」として、企業側の敗訴となった。



あるいは、ユダヤ教徒は「キッパ」と呼ばれる帽子を常時着用し、「シェバト」と呼ばれる安息日を遵守する。この日は労働はもちろんのこと、機械の操作や火を扱うことができないとされている。一部のユダヤ教国ではバスや鉄道など公共交通機関はすべて運休するうえ、国営航空会社も航空便の運航を停止するという。自国では遵守されていたそれらの規則がフランスでは通用しないと知った時、彼らの絶望と混乱は計り知れないだろう。声高に叫ばなければ自分の信じて

いた世界が壊されてしまうという危機感は、おそらくフランス社会に生きる全員に共通の想いであろう。

一方、日本の宗教人口は神道と仏教が多数を占めていると言われている。しかし実際は、クリスマスパーティーを盛大に行い、お正月には神社に参拝し、自宅には仏壇がある、といった家庭は少なくない。一見矛盾したものに見える日本人の宗教観は、「自然万物に命が宿る」とするアニミズムによるものと思われる。生きとし生けるものすべてを尊び、自然の中に宿る「八百万の神」を崇拝する世界観は、日本人の深層意識の中に深く刻み込まれている。よく言えば柔軟性と懐の深さがあり、悪く言えば節操がない、ということになるのかもしれないけれど、日本人である私たち自身がこうした精神性に救われている部分もあるのではないだろうか。

以前、旅行中にマイアミ空港に降りたことがある。天候不順のため飛行機が目的地まで飛ばず、マイアミ空港で一夜を過ごす羽目になったのだ。真夜中の空港で震えながら思ったのは、私を含め大部分の人々は家族や大事な人達を守り、出来れば明日も生き延びたいと願っている普通の人々なのではないだろうか、ということだった。現代社会には、人命を奪ってでもなんらかの教義や信仰を遵守する人々がいることも確かである。楽観主義に過ぎることを承知で敢えて言うけれど、そうした人たちに必要なのは教義や宗教戦争ではなく、温かい炬燵で膝に猫を抱いてぬくぬくと過ごすことではないだろうか。理屈はどうあれ、この世界は悪い場所ではないと、どんなにささやかでもそのように思えたら、きっと人間は心穏やかに生きていけるのだと思う。

信仰は人を救うが、時に魂の牢獄の中に閉じ込めもする。宗教に限らず、私達の誰もがきっと、幼いころから家庭や社会や国家の課すなんらかのドグマに従って生きている。ある教義に縋って妄信的に生きることが救いの道ではなく、人間としての自由に意識を向けることこそが本当の意味での魂の解放ではないだろうか。

「明日のことを思い煩うなかれ。明日のことは、明日自身が思いわずらうであろう。」（「マタイによる福音書」第六章三十四節）先日の友人達との出会いで、ある女性が言及した聖書の一節を思い出す。

「明日は明日でどうにかなるさ」と口笛を吹いて生きていけるほど、私は強い人間ではない。不確かな明日を恐れ、なんとかここでの生活にしがみついているちっぽけな日本人にしか過ぎない。それでも何とかこうして生きていけるの

は、リヨンの守り神のおかげかもしれない。神々は国境も大陸もひょいと超える。憎しみも愛も悲しみも歓びもすべて一つになり、心の中の国境でさえ、きっといつか崩れる日が来るだろう。明日は明日の風が吹くだろう。

◆リヨン風信（十一）◆

ビザ更新記

中川　莉羅

長いバカンスが終わり、九月に入ると街は突然動き出す。朝八時、街に出れば学生や勤め人達が足早に交差点を横切るのにぶつかる。白い三日月の消え残った空を見上げながら、夏はもう終わったのだと思う。

リヨンの九月の平均気温は、最高気温が二十二度、最低気温が十二度。朝晩は肌寒いが、日中はかなり陽射しが強い。天気のいい日は、曇りなく晴れ渡った空を飛行機雲が十字を切って横切るのが見える。颯爽と歩く人々の香水やコーヒーの香りが風に乗って運ばれてくる。フランスには秋が一番似合うと思う。

フランスでは新年度の始まりは九月である。通りの店には色とりどりのノートや筆記用具、登校用のリュックサックなどが並び、午後には学業を追えた学生達の明るい声が街に響き渡る。桜のほころぶ四月、真新しいランドセルを背負った小学生達がどこか誇らしげに登校するのを見慣れている私達日本人にとっては、九月始まりというのは少し奇異な感じがするものだ。

外国人学生にとって、九月はビザ更新の時期でもある。かくいう私も二年目のリヨン滞在をさせていただくに当たり、学生ビザの更新をすることとなった。学生専用のビザ更新所はローヌ河右岸の第七区に位置している。海外からの留学生達でごった返すその施設には、アラブ系人種やアフリカ系、ヨーロッパ系など様々な人種がおり、アジア系の学生達もちらほらいる。待たされることに退屈した学生達が、方々でごそごそと話し始める。その中でも特徴的だったのは、あるモロッコ人の男性である。誰かれ構わず気さくに話しかけ、時には係員に向かってジョークを飛ばしたりする。見知らぬ者同士の集まりに特有の緊張感が、彼のおかげで魔法のように陽気で和やかなものになった。

初日は定員オーバーのためあえなく出直しとなったが、おかげでそのモロッコ人の男性と珈琲を飲みながらお喋りする時間が出来た。大学で心理学を学ぶ傍ら、貧しい家庭環境にある子供達を援助する協会に勤務しているという。母国では空手を習っていたそうで、精神と肉体を繋ぐ「気」が最も大事であるとのこと。フランスという異国にいて、こうして海外の方から「気」という言葉を聞くのは何とも不思議な感じがした。と同時に、武道によって培われてきた日本人の美学や精神性を見直す機会を改めていただいたようにも思った。

翌日は気を取り直して、始業時間十五分前の八時四十五分に到着。今日こそはと意気込んで向かったが、そこには昨日と同じく既に長蛇の列が出来ている。午前十一時頃、ようやく建物の内部に入ることを許可された。そこからさらに待つこと五時間。こうまで待たされると、当然ながら皆疲れて集中力に欠けてくる。書類の不備が

あったり、文書のコピーを取るのを忘れていたりといった具合だ。しかし人の振り見て我が振り直せとはこのことで、いざ自分の番となってみると、銀行残高証明書の文書が不十分であることを担当の方に指摘されてしまった。

「いいんですよ。大丈夫、大したことじゃありません」幸い、担当の方は大変にこやかに応対してくださり、必要な文書をコピーするまでその場で待って下さると言う。てっきりまた出直しを要求されるものと思っていたが、なんとか事なきを得た。ここで仮の滞在許可証が発行され、三か月後にようやく正式にビザの更新となる。気の長い話だが、当面はここにいることを許されるわけで、肩の荷が下りた。

迅速、的確かつ丁寧な勤務態度に定評のある日本人の仕事ぶりと比べると、確かにフランスの役所仕事は煩雑でおそろしく時間がかかる。なぜそんなに時間がかかるのだろうとよく見ていると、郵便局や県庁など公共の機関でも従業員同士で談笑していたり、客をどんなに待たせようともしっかり休憩を取る。休み時間を返上してでもサービス向上に努める日本では、まず見られない光景だ。

思うに、フランス社会では「まず個人ありき」で、「あくまでも私という人間がこの社会で仕事をしている」という前提の上に労働が成り立っているのではないだろうか。これは「滅私奉公」を美徳とする日本人の労働観とは根本的に異なるように思われる。日本ではミスはあってはならないことと見なされるし、時には客側のミスでさえも従業員の責任であるかのごとく平謝りされて恐縮することがある。受付窓口のどの担当者の方に質問しても、まるで機械のように正確できちんとした答えが返ってくる。日本のサービスが世界一と言われるゆえんであろう。

一方、ここフランスの職員の方々は、貴族のように優雅な手付きで一つ一つの書類を丁寧に調べ、時にはしくじり、時には同僚のジョークに笑いながら、誠心誠意対応してくださる。仕事に時間をかけ、一生懸命に、かつプロセスを楽しみながら仕事をしている彼らの姿は、良くも悪くも非常に人間的だと思う。日仏のどちらの労働スタイルが良い悪いと一概には言えないが、結果ばかり求めて常に焦っている自分にとっては、とてもいい勉強になった。

かねてより受講している心理学講座のフランス人の恩師から、「君は完璧主義者だね」と言われたことがある。「そんなに怖い顔して自他のミスに汲々としていたら、誰もリラックスできないよ。ここフランスではみんなリラックスしている。君もそれを学ぶ必要があるようだね」と。自分としては、実にいい加減でミスが多く、間の抜けた人間であると自覚していたので、この恩師の言葉には非常に驚かされた。しかし言われてみれば確かに、自分の能力不足のゆえに、もっと努力しなければ、完璧を目指さなければと、常に自分自身にプレッシャーを与えていたようにも思う。日本社会でそのように生きている人々はおそらく私だけではないだろう。

まっすぐに目標に向かって放たれた心は、矢のように直線を描いて進む。目標に到達することのみが重大事で、朝の空に飛ぶ鳥や、道端に咲く花になど見向きもしない。その生き方には多大なる緊張が伴う。もっと速く、もっと効率的に、もっともっとと、絶えず急かされ続ける。現代社会では、多かれ少なかれ誰もが「スピード社会」の犠牲者だ。

件の恩師の言葉を再び思い出す。

「自分自身の人間性を受け入れなさい」と。「あなたは完璧じゃないかもしれない。いつも正しいことをするとは限らないし、思ったように物事が運ばない場合もあるかもしれない。でもね、『完璧であること』があなたの人生の目的ではないでしょう？あなたは『完璧』にはなれない。でも完全に自分自身であるように、幸福であるように、生きなさい」と。私はフランスに来て、果たして自分自身になれたのだろうか。答えは宙ぶらりんのままだ。

早いもので、フランスに到着してから早や一年が経とうとしている。まばゆく輝きながら通り過ぎる一日一日を、シャボン玉のように消えてしまいそうな儚い幸福を、愛読書のように胸に抱いて眠る。

ラベンダーの花の咲く湖のあるお気に入りの公園や、毎朝買い物に行くスーパーマーケットで、にっこりと微笑んでくれる店員の女性。エレベーターで乗り合わせた隣人の押すベビーカーに、ちょこんとおさまった可愛らしいブルーの瞳をした赤ん坊。いつも遊びに行く友人宅のアパートから見える、硝子のような青い空。

そうしたことが、心の中でいつか地図になってゆく。明日もきっと晴れるだろう。

◆リヨン風信（十）◆

魔法

中川莉羅

八月に入るとリヨンの街は静まり返る。少数のスーパーマーケットや観光客向けのレストランなどを除き、通りの店々はシャッターを下し、街全体の機能が麻痺したようになる。「労働が美徳」という観念を根底に持つ私達日本人と大きく異なるのは、フランス人は「バカンスのために働く」という点であろう。かといって、彼らが怠惰であると言いたいわけではない。日本人のような献身的で熱心な労働意欲には欠けるかもしれないが、フランス人も、家庭を守るため、あるいは自らの名誉のために懸命に働く。そして労働時間が終了すると、家族や友人と食事を楽しんだりバーに行ったりと、ゆっくりと夏の長い夜を楽しむ。

夕涼みがてら散歩していると、近所の広場でペタンク（la pétanque）をしている人々をよく見かける。ペタンクとは南仏の街マルセイユ発祥の球技で、名称はプロヴァンス地方の方言「ペタンカ（pèd-tanca）」（「両足を揃えて」の意）に由来する。砂上のコートに描いたサークルを基点として木製の目標球を定め、金属製の球を投げ合い、相手の球より近づけることで得点を競う。一九〇七年に考案されたと言われており、現在では三十万近くの競技者が登録されている。ペタンクの競技には特別な技能は必要なく、ルールは上述の通りごくシンプルで一般市民に広く親しまれている。

かくいう私も、六月の心理学研修でドルドーニュ地方を訪れた際、フランス人の友人達に教わりペタンクに挑戦する機会を得た。陽射しの眩しい夕方の庭でバーベキューをした後、腹ごなしがてらペタンクでも、という話になったのである。研修のメンバーは私を含め八名だったが、途中で抜ける者もおり、結局三人対三人のチームに分かれて対戦した。両足を揃え、テニスボールほどのサイズの、意外にもずっしりと重いその球を放り投げて落とす。力が強すぎても駄目だし、弱すぎても目標に届かない。上手なプレイヤーを観察していると、優雅な腕の動きに合わせてボールが放物線を描いて狙った場所に落ちてゆく。見事なものだ。蟋蟀の涼しげな音色が聞こえ始めた夜の庭で、月の光を頼りにペタンクの球が投げられる。かつんと固い音が響く。

「今の僕の投げた球、どう？彼の投げた球より近かったでしょう？」

と、いい年をした大人が頬を紅潮させ判定を争う。多くのフランス人は何をするにもエネルギッシュで、かつ負けず嫌いである（もちろん個人差はあるけれど）。我がチームは残念ながらあと一歩のところで敗退してしまったが、「初挑戦の割にはよく頑張ったよ。ナイスプレイ！」と、皆一生懸命に慰めてくださり、嬉しいやら気恥ずかしいやらの初参戦であった。

ドルドーニュ地方からリヨンの街に帰り、いつも通りの日々が訪れた。朝、近所の公園を少しジョギングする。「金の頭」(Parc de la Tête d'Or)の名を冠したこの公園には、伝説によると金塊で出来たイエス・キリストの頭部が盗賊によって埋められ、今でもどこかに眠っているのだと言う。夏の陽射しを浴びて輝く湖、薔薇の庭園、そして百三十種類もの動物の生息するこの場所は公園というより森のようで、言われてみれば宝物を隠し持つ魔法めいた場所に思えて来る。

公園でのジョギング中、りすに出くわすことがある。するすると器用に樹を登る愛らしい動物を見て、初めのうちこそ息を呑みシャッターチャンスを狙ったものだが、慣れとは恐ろしいもので、この頃ではあまり注意を払わなくなってしまった。道を横切るガチョウの群れに出会うこともある。人間の方が恐縮してしまうほど、堂々と横断する姿は優雅でさえある。彼らには彼らの自由と生きる権利があるのだ。

ある日、このようなことがあった。五歳くらいの金髪の少女が自転車に乗って私の前を走っており、父親と思しき男が彼女のそばをゆっくりと歩いていた。あどけない少女は道端に落ちた葉を拾い集めようとして、ただでさえ不慣れな自転車の操縦がすっかりお留守になっている。彼らの邪魔にならないように背後を歩いていた私は、ふと、少女が一枚の葉を取

り落したのを見た。駆け寄ってその葉を渡すと、おそらく日本人がめずらしいのであろう、淡いブルーの瞳で少女はまじまじと私を見た。フランス人のこのような反応には慣れているし、ましてや子どもならアジア人に驚くのは尚更だろう。その場を去ろうとすると、彼女は拾い集めていたコレクションの中からつややかな葉を一枚、私に差し出してくれたのである。まだうまく表現できない少女に代わって、父親が御礼を述べてくれた。まるでルノワールの絵のように、親子は夏の光の射す森の奥へと去って行った。

幼い頃は、誰もが未知の世界を生きているように思う。目に映るすべてが新鮮で、日々は眩い光と夢とたっぷりの愛情にあふれている。手を伸ばせば青空の向こうにさえ手が届きそうな気がする。しかしいつの頃からだろう、私たちは冒険する勇気を失ってしまう。森を駆け抜けるりすに見向きもせず、蜂の襲撃に脅かされラベンダーの花の匂いに身をゆだねることもなくなる。

魔法は消え、世界は色を失い、ただ一人景色の中に留まる。

冷蔵庫の中には気の抜けたサイダー、物言わぬトマト、モノクロの夏。

誰の人生にもふとそのような瞬間が訪れるものだと思う。

「魔法」はいつも、外の世界にあるのだと私たちは幼い頃から教え込まれる。プレゼントをどっさり抱えたサンタクロースは一年に一度だけトナカイの橇に乗って現れることになっているし、おとぎ話のシンデレラでは、ある日突然現れた魔法使いによって奇跡が起こる。かぼちゃは立派な馬車になり、ハツカネズミは忠実な御者に、灰かぶり少女は光り輝くお姫様になる。

「いい子でいれば、いつかきっと素晴らしいことが起こる」と、子どもたちは夜毎に言い聞かされて眠る。

大人になり、世界が魔法を失うように思われる時、私たちは「大人なりの」手段を見出す。夢や目標を抱け、ダイエットだ、キャリアアップだ、ポジティブシンキングだと、外部の情報に絶えず急き立てられ、蜃気楼のように思われるこの現実を超えた先に幸せな未来が待っているのだと思いこむ。未来は有料であり、時間やエネルギーや心身の健康といった対価と引き換えに報酬が得られる。私たちは自らの人生を資

本に「安全な投機」を行い、魔法を失う。この社会では魂の不在に対して労働保険は下りない。

しかし幸せとは与えてもらうのを待つものではなく、がむしゃらに手にするものでもなく、自分の内側に発見しなければならないものではないだろうか。どんなに些細なことでもいい。人から見たら他愛のないことでもいい。一瞬で消えてしまうものでもいい。夜の庭に響くペタンクの音。風に吹かれて飛ばされる一枚の葉。そうしたものを丁寧に拾い集めてつなぎ合わせる。そのように生きるしかないのではないか。

強い陽射しと風を受け、眠る街を歩く。日々の隙間を縫うように、時折友人と会う。魔法のように見えた日々も、嵐に転覆しそうに思えた夜も去り、穏やかな日常の中でひっそりと息をする。少女のくれた葉は色褪せてしまったけれど、私は今でもそれを手帳にはさんでいる。教会の鐘の音が聞こえる。さあ今日も生きるのだ。この街のどこかに隠されている魔法を探して。

◆リヨン風信(九)◆

一期一会

中川莉羅

七月十四日はフランス共和国の成立を祝う革命記念日(Fête nationale)である。日本では「巴里祭」の名前の方が馴染みがあるかもしれない。一七八九年同日に発生し、フランス革命の発端となったバスチーユ監獄襲撃および、この事件の一周年を記念して翌一七九〇年に行われた全国連盟祭の起源となっている。巴里祭当日、パリでは軍事パレードが開催され、フランス大統領の出席のもとシャンゼリゼ通りからコンコルド広場までを行進する。また夕方にはフランス各地で花火が打ち上げられ、慣例として消防士による舞踏会が行われる。

ここリヨンも例外ではなく、巴里祭の前日の十三日には軍事パレードが行われた。規律正しく一糸乱れぬ動き

を見せる軍服の群れ、続いて消防士達の行進。街中のスピーカーから国家が聞こえ、道行く人々は腕を振り振り、国歌に合わせて歌いながら陽気に歩いていた。十四日の夜、フルヴィエールの丘から盛大に花火が打ち上げられる。闇の中で胸をととどろかすような轟音に圧倒されながら、それでも人々は光を求めてやまない。

この国の人々が国民の自由と名誉のために流した血は、決して生半可なものではなかったはずだ。彼らが闘って勝ち得た権利と誇りは、現代のフランス人にも脈々と受け継がれているように思う。しかし現代のフランスはまた、フランス革命当時とは違う種類の闇に直面している。移民問題、政治不信、ヨーロッパ連合内での自国のアイデンティティーの確保などである。

「ナポレオンやジャンヌ・ダルクのようなスーパースターの到来が必要なんだ」と、生粋の愛国主義者であるフランス人の友人は言う。「僕たちは生ぬるい暗闇の中に留まっているべきではない。意識的に光を探し求めなければ」と。目のくらむような光を真っ直ぐに受け入れる力のある人間はしかし、果たしてこの世界にどのくらい存在しているのだろう。

七月、リヨンの街はまだ活動中である。長いバカンスに突入する学生や退職中の方を除き、大半のフランス人は忙しく働いている。私はと言えば、大学でのフランス語学習講座が五月に終了し、六月末には担当していた日本語講座が終了した。そうなると面白いもので、突然ぽっかり空いた時間を埋めるように友人達からの誘いが舞い込んできた。

ある夏の日、担当していた日本語クラスの生徒さん達とお会いした。メンバーは私を含め八名。ローヌ河沿い

に浮かぶ船上バー「スター・フェリー号」にて明るい夏の夕暮れを楽しんだ。漫画やアニメーションの影響で日本文化に興味を持たれた方が多く、友達同士の談笑のようなリラックスした空間での授業だったのだが、その延長でこうして授業外でもお会いする機会を持てたことは、私にとってとても嬉しいことであった。

「がんばれ」と日本語で腕にタトゥーを入れた若いソムリエの男性。日本に旅行した際に味わったメロンパンが忘れられず、また食べたいとおっしゃった笑顔の可愛らしい女性。ボーイッシュな短髪に、日に焼けた肌の美しい女性が、日本で人気のキャラクターの「りらっくまが好き」とおっしゃったのもなぜだか妙に愛おしく感じられた。生徒さん一人一人がとても個性的で、それぞれが日本文化に興味を持ち、熱意を持って取り組んでくださるのが痛いほど伝わってきた。毎回の授業で尽きることのない質問を文字通り矢のように浴びながら、私自身改めて「日本語」という言語の不思議さや文化の奥深さに向き合う日々だった。

例えば、「本音と建て前」という言葉がある。私達日本人にとってみれば改めて問い直すまでもなく、空気のように社会全体に浸透している概念である。しかし私達は、いつ「本音」を言い、いつ「建て前」で素顔を飾っているのだろう。この二つを明確に使い分けているようで、実際には境界線は曖昧なものではないだろうか。

「先生は僕たちと話している時、『ホンネ』なのか『タテマエ』なのか、どちらですか」と、冗談交じりに質問された生徒さんがいらしたが、この問いは長らく胸の中に残った。他者に対して誠実であるということは、自分自身に嘘をつかないということにもつながると思う。常に真実のみを口にするのは社会生活を送る上でとても難しいことだし、時には優しい嘘が必要な場合もある。しかし、私自身長らく曖昧な対人関係を続ける中で「仮面」と「素顔」が一体化しいてはいなかっただろうか。しかし生徒さん達のはじけるような笑顔と、弾丸のような早口のおしゃべりと、爽やかな夏の夜風に、深刻な議論はさておき、楽しもうよ！と背中を押されたような気がした。

別の日には年上の二人のアメリカ人の友人と会った。彼らのうち一人は大学での元クラスメートであり、

心理士の仕事に従事した経験のある博識な紳士である。その穏やかな風貌と豊富な知識やユーモアのセンスで、クラスの中でも彼は秀でていた。彼の友人であるもう一人の男性は、笑顔の優しく、サックスフォンを趣味とする素敵な人である。リヨン滞在三年目を迎える彼らは、フランスの保険や税制度などを熱心に分かりやすく教えてくれた。しかしどんなに小難しい話も、深刻なカルチャーショックの逸話も、アイスクリームの魔力には勝てない。いい年をした大人達が子どものように目を輝かせ、やれラズベリー味だの、メレンゲクリームなどと騒ぎながらカフェテラスでの時間を過ごした。夏の暑さを忘れさせるような爽やかな午後のひとときであった。

そしてまた別の日には、同じく大学の元クラスメートのコロンビア人の女性と会った。約束の当日、リュックサックにスポーツバッグといった大荷物で現れた彼女は、「バラの街」と呼ばれるフランス南西部のトゥールーズから帰ってきたばかりで、今晩、その足で南東部の街アヌシーへ出発するという。システムエンジニアである彼女は、パリでの大学進学と研修を九月に控えている。書類申請や面接などの準備に一時は気がくじけそうになったが、今やっとバカンスを満喫しているの、と明るい笑顔の彼女。長い黒髪をポニーテールにし、化粧気のない素顔にタンクトップとジーンズ姿の彼女はとても若々しく、ほとんど十代の少女のように見えた。未来に向かって動き続けている人特有の風を残して、颯爽と彼女は去って行った。

大学で毎日のようにクラスメートたちと共に過ごし、授業が終わると「また明日！」と言って別れ、同じように次の日を迎える。そんな生活が当たり前だったころは、彼らと会わない日々を想像するのが難しかった。しかし約一年近く続いた学業期間が終わった今、各自がそれぞれの目標に向かって巣立ってゆく。母国に一時帰国する者、別の大学に進学する者、職業研修を始める者など様々である。

ある日ふと誰かと出会い、時間を共にし、また離れてゆく。大人になるにつれ、私たちの誰もがそうしたことに慣れてゆく。「またいつでも会える」と信じていた人に、次の日にはもう二度と会えないかもしれない。本来私たちが生きている世界はそうした闇を孕んでいるはずだ。日の当たる場所のみを求めて向日葵のように生きていけたらどんなにか幸せだろうと思う。しかし、私達が手にしている（と思いこんでいる）幸福が無知の上に依拠しているのならば、何の価値があるのだろう。

◆リヨン風信（八）◆

ディジョンへの旅

中川莉羅

アンドレ・ジッドの『田園交響曲』の中で、盲目の若いヒロイン・ジェルトリュードが口にする次のような言葉がある。

「私が依拠している幸福は無知の上に成り立っているように思えるのです。そんな幸福なんていらない。私は幸福に固執するのではなく、真実を知りたいのです」

これに対して、孤児同然だった彼女を引き取った牧師は「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。」と聖書の一節を引用して答える。「罪とは魂を曇らせるものであり、歓びに反するものである」とも彼は言う。

闇は時におぞましく、時に優しい。闇はまばゆすぎる真実の光から私たちを守り、幼子をあやす母親のようにその胸に私たちの無知をかき抱く。目をつぶり、慣れ親しんだ花の匂いを嗅ぎ、モノクロームの世界に留まり続けることは、果たして罪だろうか。それでも勇気を持って光をまっすぐに求める人間になりたいと私は思う。光に目が慣れるまで涙を流し続けるとしても。

夏の日差しをまともに肌に浴びても、強い風に汗も涙も吹き飛ばされてしまう。リヨンの夏はまだ始まったばかりである。

夏のバカンス中、かねてからの友人の誘いに応じてディジョンを訪れた。フランス中部に位置するこの都市は、かつてはブルゴーニュ公国の首都であり、歴史地区はブルゴーニュの葡萄畑の一部として世界遺産リストに含まれている。マスタードの産地としても有名である。

リュクサンブール出身のこの友人とは不思議なご縁で、かれこれ十年以上の付き合いになる。リヨン留学をする大分前のことになるが、フランス北東部の街ストラスブールに留学していたことがある。当時通っていた語学学校では、授業外のアクティビティとして言語交換学習のシステムがあったのだが、彼女は日本語を、私はフランス語を学習したいということで知り合い意気投合したのである。友人と私は、生年月日が一緒である。すらりと背が高く、明るい栗色の髪の毛を風になびかせ、Tシャツにジーンズ姿で外国を次々に飛び回る活動的な彼女と、どちらかというと内気で引っ込み思案な私。見た目や性格こそ違うものの、「双子の星座の友人」と彼女は私のことを呼んでくれる。ストラスブール留学の後、彼女はプラハへ渡り、私は日本に帰国した。デッサンが上手で、芸術と旅をこよなく愛する彼女は、旅先からいつもポストカードを送ってくれた。プラハ、ブラジル、ポルトガル、バルセロナ、ニューヨーク。お互いの誕生日には毎年プレゼントを贈り合ったものだった。彼女がリュクサンブールに帰国してからも、細々とではあるが交流が続いていたけれど、二度と会う機会はないのだろうと思っていた。しかし、今回の私のリヨン留学を機に、こうして再び会う機会が出来た。人生は本当にわからないものである。

「アーバンスケッチャーズ」というグループがいる。街中でのスケッチをすることを目的に、見知らぬ人々が集い、交流を深めるという企画である。中にはプロのアーティストもいる。彼らの仲間はいたるところにおり、世界中のありとあらゆる街の風景、道行く人々、建築物などを描く。友人も数年前からこの企画に参加しているようで、今回のディジョンへの旅もその一環というわけである。リュクサンブールからディジョンへは電車で約四時間半。リヨンからディジョンへは長距離バスで約二時間半。「フランスに来る機会があったから」という理由で、私と会うことを考えてくれたのが嬉しかった。何年もの間、たとえ会わなくても、律義に旅先からの絵葉書やプレゼントを贈り続けてくれた彼女らしいと思った。

ディジョン初日は六月だというのに気温が三十度近くまで上がり、上着などいらぬほどだった。昼過ぎに到着し、友人と落ち会い、少し街を散歩してから広場のテラスでお茶を飲んだ。天気のよい土曜日の昼下がりのカフェテラスはどこも

かしこも満席で、年若いウェイターが真っ赤な顔で、あちらのテーブルこちらのテーブルと右往左往している姿がなんとも気の毒だった。ノンアルコールのモヒートで乾杯、友人は小さなクレープも頼んだ。強い陽射しの下、日に焼けた肌をさらし、人々は笑いさざめきあっていた。空白の時間を埋めるように、お互いの近況を一通り話し合った。ストラスブール留学時代、まだ学生だったころからあっという間に時間が過ぎ、友人も私もそれぞれまったく別の道を歩んだ。それでも長い年月の後、雑踏の中、交差点を横切った時になつかしい顔を見たような不思議な感覚に陥った。

夕方六時頃、総勢百名近いアーバンスケッチャーズの面々で集まり、集合写真を撮った。フランスの夏の日は驚くほど長く、夜の九時頃になってようやく日が沈む。食前酒や軽食をつまみながら人々は長い長い夏の夕べを楽しむ。フランスの人々には、初対面であろうと見知らぬ外国人であろうと、「こっちにおいでよ。一緒に楽しもう」と声をかけてくれる懐の深さがある。アーバンスケッチャーズの仲間達もその例外ではなく、スケッチをするわけでもなくただその場に居合わせただけの謎の東洋人である私に気軽に声をかけてくれ、一緒に笑いあって楽しい時間を過ごした。

二日目、友人はアーバンスケッチャーズの仲間達と共に街の風景を描きに行った。ぽっかり空いた時間を利用して、美術館に足を伸ばした。エジプト時代の貴重な歴史的資料から、中世のキリスト教のイコン、ルネッサンスの時代の華々しく優雅な彫刻まで、様々なスタイルの芸術作品が展示されており、見飽きることがなかった。それぞれの時代の生活様式や価値観に応じて美術のスタイルもどんどん進化してゆく。永遠に持続するものなどこの世に何もないのだ。それでも、自然の美を表現したい、神への憧れを具現化したい、私達が生きているこの「生」の瞬間をなんとかして残しておきたいという切なる想いはいつの時代も人類共通なのではないだろうか。

昼過ぎ、友人と合流し、街をぶらぶら散歩した。ちょうど蚤の市が開催されており、鮮やかな夏物のワンピース、年代物の骨董品、まばゆい光を放つアクセサリーなどが目を引いた。中でも注目すべきは、ディジョンのシンボルである梟のマスコットである。友人は、木彫りの小さな梟とエメラルドグリーンの石のついた指輪を買った。ぎょろりとした目玉とつんと澄ました嘴がユーモラスに表現されているその梟は、きっと友人に幸福を運んでくれることであろう。

歩き疲れた頃、蚤の市近くの木陰のテラスでお茶を飲んだ。

「なんだかスケッチをしたい気分だわ。ここで描いても大丈夫かしら？」と友人。

彼女がどのように絵を描くのか興味があったので、もちろんどうぞと応じた。ナップザックから折りたたみ式のスケッチブックと、水彩絵の具、絵筆などをさっと取り出し、手際よくテーブルに並べると、友人は私達の目の前に座っていたある家族を描き始めた。鮮やかな桃色のワンピースを身にまとった若い母親と赤ん坊、そのご主人であろう、日に焼けた腕にタトゥーを入れたたくましい体つきの男性、赤ん坊の祖父母と思われるご夫婦、ほっそりとした体に藍色のワンピースを身にまとったショートカットの女性。とめどなく喋り続ける彼らの肌の上に木漏れ日がちらちらと踊り、強い風が時折吹いた。絵の具を混ぜ合わせ、水をたっぷりと絵筆に含ませ、友人はためらうことなく絵筆を走らせ続ける。

「紫色と灰色の中間のような微妙な色が欲しいわ。この建物の壁を塗るのに必要なの」と友人。色は偶然に生まれるのだと彼女は言う。

「ぴったりした色を見つけるのにはもっと訓練が必要なのだけれど、大体は直感で色を作るの。それにこれはスケッチだから、あまり難しく考えないようにしているの。完璧を求めると何も描けなくなってしまうから」

相変わらず手際よく絵の具を混ぜ合わせながら友人は続ける。

「例えばね、この建物の向こうに教会があるでしょう？　その建物の線や彫刻のディテールを一つ一つ詳細に描くことは私はしない。もちろん、アーバンスケッチャーズの中にはそういうスタイルの人もいる。驚くほど精密に、まるで建築の設計図を描くようにね。それはとても素晴らしいことだし、

私には出来ないことだから尊敬するわ。けれど私のスタイルはそうじゃなくて、もっとラフで、温かみがあって、人間的なの」

アーティストのスタイルは、技術はもちろんだが、個性や人間性にもよるのだという。スケッチ作品にはそれぞれのアーティストの世界観が如実に反映されている。写真のように世界を忠実に再現しようとも、百パーセント客観的な視点を持って表現することなど人間には不可能なのだ。

ふと、日本での大学時代の友人が言った言葉を思い出した。「世界を描写するとは、愛するという行為である」と。　当時友人がこの言葉を口にした際、私にはよく意味が分からなかった。今から思うと、おそらく彼が言いたかったのは、世界を描写するためにはそのありのままの姿を見つめなければならないということではないだろうか。批判も賞賛もせず、ただあるがままに受け止めること。この世界はしかし、ただ善と美にあふれたおとぎの国ではない。光と夢と希望に満ちた世界を愛することなら、たやすいことだろう。しかし暗闇のない世界など存在しない。貧困や憎しみや戦争のあるこの現実を見つめ続けること。描き続けること。それこそが愛であると。人間である私達にはこの世界を改善するこ

とも創り変えることも不可能だけれど、それぞれのキャンバスにそれぞれの色を使ってちっぽけな絵筆を走らせることなら出来るのかもしれない。

友人はさっぱりとした顔で現状を受け入れているようだった。「私は私、このように生きていくの」とさわやかに明るく言い切る姿がとても清々しかった。生きていれば誰しも様々な困難に出くわすけれど、それでもまだ笑うことはできる。真っ白なキャンバスをこれから何色に染め上げればいいのだろう。おそらく希望を失わない限り、何度も何度も世界を塗り替えることができる。ディジョンでの友人との再会はそのようなことを教えてくれた。

◆リヨン風信（七）◆

「終わりとはじまり」

中川莉羅

五月一日より平成から令和へと年号が変わり、新しい時代が始まる。天皇陛下ご存命中の退位とのこともあり、華々しい幕開けだったと、家族や友人から伝え聞いた。「令和」の名にふさわしく、美しく明るく爽やかな風が日本に吹くことを切に願う。

フランスでは、国の象徴とも言えるパリのノートルダム寺院が四月十五日に火災の被害に遭い、千年近い歴史を持つ大聖堂とその貴重な芸術作品の数々の将来が危惧されている。現在も復興作業は継続進行中であるようだ。折しも、大学の授業では世界遺産の重要性や、人類全体の共有資産の保護などについて学んだばかりだったので、余計に胸が痛む。私自身は日本人として生まれ育ち、国籍も血筋も文化的なアイデンティティも完全に日本に依拠しているわけだが、どういうわけか、フランスという国に身を置いていると、フランス上空を取り巻く暗雲から逃れられないような不思議なシンパシーを感じる。このような状況の中、五月二十六日にはヨーロッパ連合の議員選挙が行われる。イギリスのヨーロッパ連合脱退の件もあり、先行きが危ぶまれる。フランスひいてはヨーロッパの明るい未来を願わずにはいられない。

五月のフランスは国勢を反映するかのように不安定な天候が続く。暴力的なほどの日の光に晒されるかと思えば、冷たい雨風が吹き、まだコートを手放せないと思う日もある。しっかりと何かに摑まっていなければ、強い風に吹き飛ばされ

てしまいそうだ。あと一息、もう一息。そう思いながら毎日大学に通った。

先日の大学の授業で口頭発表の機会を与えられた。生徒各自、それぞれの専門分野について三十分ほどの発表をするというもので、コロンビアのエネルギー資源の活用法、韓国の教育制度、中国の食文化、パラグアイの先住民言語であるグアラニー語など様々なテーマが飛び出して非常に興味深かった。

僭越ながら、私は俳句について紹介させていただいた。近年では、漫画やアニメーションの影響で日本文化に興味を抱いてくださる方々が数多くいる。特に若者世代は、国籍を問わず日本のアニメーションを幼い頃からテレビで観て育ったということもあり、日本人というだけで親近感を抱いてくださる方がおられるのは本当にありがたいことである。一方で、多少の歯痒さを感じていたのも事実である。一昔前は、日本のイメージといえば「忍者、侍、富士山」。現代ではない。日本にはもっと未知の美しい文化が眠っているのにと、もどかしい気持ちを抱えていた。今は、「漫画、アニメ、寿司」。いずれも日本文化の重要な側面なのだが、偏ったイメージが独り歩きしているように思えてならない。

しかし、私自身は日本文化について何を知っているのだろう。今回、俳句について口頭発表をする機会をいただき、改めて俳句について調べていく中で、恥ずかしながら新しい発見の連続であった。

また、私事で恐縮であるが、五月十九日は祖父であり俳人・中村石秋の命日ということもあり、句集『新樹風』を改めて読み直した。祖父らしいおおらかな笑いと鋭い感受性で彩られた数々の句によって、まるで写真のように鮮やかに切り取られた風景が浮かび上がってきた。祖父の存命中に俳句を始めなかった自分自身の浅はかさ、奥深い世界を見通すことの出来なかった幼さが悔やまれる。

人間の生活は、時に驚くほど雑多で無意味な事柄から成り立っているように思う。極論を言えば、ノーベル平和賞を受賞するような偉人の生活も、毎朝起きて顔を洗い、歯を磨くといったごく小さなことから始まるのではないだろうか。

あるいは、家族内の小さな諍い、金銭面のトラブル、仕事での人間関係の煩わしさや　学業におけるストレスなど、

数え上げればきりがないが、それらの問題に煩わされない人間がどこに存在するだろう。芸術というものは、それら人間の卑小さを超えたところに存在するのだと私は思っていた。鷹のように雄々しく飛翔し、人間社会を軽々と超えることのできる英雄のみに許された偉業なのだと。

しかし、生前の祖父を思い出してみるに、祖父と俳句との関係はむしろ、スケッチのように自然なものだったように思う。祖父が東京に足を運んでくれた際、代々木公園や明治神宮を散歩しながら見上げた桜の樹。必ず足を伸ばす紀伊国屋書店に流れている清潔な沈黙。飲食店に入る前のありふれた待ち時間でさえ、祖父にとっては句作の時間であった。亡くなる直前の病室においてさえ、見舞いに行った母と祖父は毎日小さな「句会」を開いていたと知った。祖父にとって、生きている中で目にするもの、手に触れるもの、どんな小さな虫や花も、自らの病状でさえ、句作の題材となりえた。まさに「生きる術」であったのだと思う。

祖父の助けがあったとしか思えないのだが、口頭発表もぎこちないながらなんとか無事に終了し、担当の先生からも「俳句の良さが伝わった。俳句は日本文化の大使と言ってよいと思う」という励ましのお言葉をいただいた。

レオナルド・コーエンやアレン・ギンズバーグといったアーティストや詩人にとって、俳句は一行詩であり、自然と人間を結ぶ魂の表現であると考えられていることや、アメリカ合衆国の教育機関でも、学生達の表現力や自発性を促すため、俳句が授業の一環として取り入れられていることなどを今回の発表を通じて知り、日本独自の文化だと思っていたものが、世界共通の資産となりうることを知り大変嬉しく思った。無形文化財としてのユネスコへの登

録が待たれる中、俳句は世界に向かって飛翔していくのだと思う。

大学の授業は五月末で終了する。昨年の十月一日から始まった、この長いようで短い学業期間がひとまず終了する。「ひとまず」と書いたのは、フランス語が母国語ではない以上、外国語学習者としての課題は一生続くと思うからだ。そういった意味で、ここリヨンでの一年弱の語学留学の機会を得たことはとても貴重であり、大学での授業だけではなく、生活そのものが学びの場であったと思う。

大きな歴史の流れの中で、一つの時代が終わり、また新しい時代が始まる。令和元年という大きな節目を迎えたことで、日本も大きく変わっていくことだろう。そして私自身も前に進まなければならない。何一つ同じ状況のまま留まっているものなどない。強い風が吹き、大木が折れ、空っぽの街に何も残らないとしても、あゆみを止めてはならない。

神の目から俯瞰すれば、ちっぽけな日本人の小さな挑戦など取るに足らないことであろう。それでも、私にできることは私の世界を変えていくことだけだと信じて、今日も生きる。

◆リヨン風信（六）◆

スイスの春に想う

中川莉羅

三月末の週末、スイスの友人宅に招待していただいた。リヨンから遠距離バスに乗って約四時間。ローザンヌを州都とするヴォー州はスイスの南西に位置する。北にヌシャテル湖、南にレマン湖があり、フランスのオート・サヴォワ県とはレマン湖上で国境を接する。今回はそのヴォー州にある小さな街シュズィエールを訪れる機会をいただいた。

心理学研修の気心の知れた仲間内の集まりで、誰に気兼ねすることもない陽気な三日間だった。メンバーは私を含め総勢十名。ログハウスの窓から見えるモンブラン。「白い山」という名の通り、青空を背に雪化粧をした美しい山並みである。歓声を上げる私達だったが、スイス育ちの友人は「私は小さい頃から両親に連れられて、毎年ここに来ているからもう慣れてしまったけれど。」とのこと。羨ましい環境で育った人もいたものである。

スイスとフランスの文化的差異を揶揄するジョークは数多く存在する。敢えて大まかに図式化してしまうと、スイスの国民的特徴として、歴史や伝統を重んじる厳格な面があり、時間や交通規則を厳守する。これに対してフランス人は陽気でおおらか、人生を謳歌することを何より大切にする。交通規則に関しては大雑把でルーズな人が多く、赤信号でも平気で横断歩道を渡る。スイスのチーズはグリュイエールと呼ばれる穴あきタイプのものが代表的だが、フランスのチーズはコンテが有名である。言語面に関して

言えば、スイスはドイツ語圏、イタリア語圏、ロマンシュ語圏、フランス語圏に分かれているが、この地域で話されている言語とフランスで話されている標準フランス語とでは少し異なる。例えば、標準フランス語では数字を数える際、70(soixante-dix)を「60(soixante)＋10(dix)」、80(quatre-vingt)を「4(quatre)×20(vingt)」、さらに90(quatre-vingt-dix)を「4(quatre)×20(vingt)＋10(dix)」とややこしいことこの上ない表し方をするのに対し、スイスフランス語では70を「septante」、80を「huitante」、90を「nonante」とそれぞれ表す。

最も大きな違いは、永世中立国であるスイスは欧州連合に加盟せず、独自の国政を保っている点であろう。近年では、スイスの健全な経済状況や、スイスと欧州連合（ＥＵ）間の人の自由な移動を認める協定を背景に、ＥＵ加盟国をはじめとする国々から何万人もの労働者がスイスへと移住している。他国と比較すると、スイスに住む外国人は人口の約四分の一と割合が高いが、市民権を取得するための条件は非常に厳しい。これに対してフランスは未熟練労働者の受入れは抑制し、フランスの経済・社会発展への貢献度が高い高技能外国人労働者については積極的に受入れるという「選択的移民」の受入れという政策を採用している。

友人の運転する車に揺られてぼんやり街並みを眺めていたら、民家の軒先にスイス国旗が掲げられているのを見かけた。公共建築物でもなく、国民の祝日でもなく、何の理由もなく、ただ誇らしげにスイス国旗がいくつも青空に舞っている。それを見たフランス人の友人曰く、

「フランスもスイスのように国旗を掲げるべきだ。自国の文化にもっと誇りを持つべきだよ。現在のフランスでは移民受け入れ問題が頭痛の種で、一部の左派勢力のせいでフランス全体がカオスと化しているような状況だけれど。僕たちは自分の国にいるのだから、もっと胸を張ってもいいんじゃないだろうか」と憤慨していた。

自国に誇りを持つとはどういう感情だろうか。私自身はルーツも文化も完全に日本に依拠しているわけだが、そこの土地で育ったということと、日本国民である自分に誇りを持つということはまた異なるように思われる。別の話題になり、その話はそれきりになってしまったのだが、私にとっては大きな課題が残った。

一日目の夜は、各自持ち寄りの料理とお喋りで楽しく過ぎていった。手作りのパンにラクレットと呼ばれるチーズ料理、ワイン、オリーブとトマトのサラダ、メレンゲ・クッキー。食後は「タイムズ・アップ」というパーティーゲームで盛り上がった。「時間切れ」という名前の通り、カードに書かれた有名人の名前や人気映画の題名を三十秒以内で言い当てるというゲームである。二人一組のペアになり、一方がカードを引き、もう一方がカードに書いてある単語を推測する。例えばキーワードが「ゴジラ」だとすると、一方は怪獣の真似をするなり、「害獣」などヒントとなる単語を発するなりして、もう一方がその単語を当てる。数多く単語を当てたグループが勝ちというわけだ。一見単純なようだが、私にとってはかなりの難題であった。

「ヨーロッパの歌手やテレビ番組なども出題されるので、フランス語圏の文化に精通していないとこのゲームは難しいのではないか」と私を庇ってくれる人もいたのだが、厄介者になるのも歯がゆく感じられ、大人気なく意地を張って結局ゲームに参加した。結果は惨敗だったのだが、いい歳をした大人達がパントマイムゲームをし、汗をかき、笑い転げながら楽しい時間を過ごせた。

二日目は、登山電車に乗りヴィラール・シュール・オロンという山の麓の街へ出掛けた。一年中雪が解け残っているそうで、スキーシーズンが終わった後でも、陽の光に照らされた雪が砂糖菓子のように輝いていた。雪は人を寡黙にするのだろうか。瞑想に耽る者、疲れて足を止める者、自然の美しさに感銘を受ける者…。それぞれそぞろ歩きながら静謐な山の空気を味わっていた。

「自然は僕たちが足を止めるのを許さないのかもしれない。」

ふと、先述したフランス人の友人が言った。

「僕たち人間は怠け者だから、幸せであれば飽和状態になり、進化の足を止めてしまうのかもしれない。誰も苦しみなど望んでいないけれど、残念ながら、この世界には幸も不幸

も善も悪も光も闇も存在する。僕たちの目的はそれらすべてを経験し、受け入れ、学ぶことではないだろうか。この地上での人間の役割は、ゴールに到達することではなく歩き続けることでさらに進化することなのではないだろうか。」

陽気な食事やはじけるような馬鹿笑いの合間に、突然差し挟まれた友人の言葉は、私の胸に重く響いた。スイスに招待されたメンバーのほとんどが、しかし一月と二月に行われた心理学研修に参加したばかりなので、人間の内面を見つめる作業をするという意味で、この友人の発言はあながち場違いともいえないのだった。

幸せであることと進化することは、果たして本当に矛盾するのだろうか。生きることに貪欲であればあるほど、前進したいと望むのが人間というものではないだろうか。それとも、それは都合の良い解釈にしか過ぎないのだろうか。答えはまだ出ないままである。

スイス滞在最終日の日曜日は、三月末とはいえ暑いくらいの陽気で、長袖の腕をまくりショートパンツにサングラス姿でそぞろ歩く人々の姿を見かけた。この日はちょうど冬時間から夏時間への切り替わりの日でもあった。日本とヨーロッパの時差は八時間から七時間に縮められることになる。朝晩は一度まで気温が下がりまだ冷え込むとはいえ、日中は二十度近くまで上がることもある。なんと極端な気温差だろう。

ヨーロッパの春を女性に例えるなら、鮮やかな紅色の花を髪に挿し、この世の歓びを歌うカルメンといったところだろうか。強すぎる太陽の光、シャンパン、陽気なお祭り騒ぎ、オーケストラ。これに対して柔らかな闇に音が吸い込まれるような日本の春にはジャズピアノの音がよく似合うと思う。朧月夜にむせぶような花の匂いのする日本の春が懐かしく思い出される。

日本人としての記憶やアイデンティティがなくなることは決してないだろう。私はこの地で、日本人として何が出来るのだろう。そのようなことに思いを馳せる今日この頃である。

◆リヨン風信（五）◆

「慣れる」ということ

中川莉羅

リヨンでの留学生活が始まってから、早くも半年が過ぎ、街並みや時間の流れに体が順応してきた。どの道が大学までの近道か、どの界隈が危険か、どのカフェが落ち着くか。野生の動物が住処を定めるように、直観で動きながら要領を得ていく。

こうして、いつしか自分のルールが出来るようになる。定刻に家を出て、決まったルートを選び、決まった教室で授業を受け、決まった店で買い物をする。土曜日の仕事をあわただしく終え、日曜日にはバスに飛び乗り、昔馴染みの友人を訪ねて小さな街へゆく。半年前には空白だった手帳が予定で埋まり、少しずつ心の中の地図が出来上がってゆく。

そんなある日、日本からの友人がリヨンを訪れることになった。「友人」と呼ばせていただくのもおこがましいのかもしれない。というのは、フランス文化に関するインターネットサイト上で数年前に知り合ったことがきっかけで情報を交換させていただいていたのだが、実際にお会いしたことがなかったからである。ヨーロッパの歴史やキリスト教建築に造詣の深い方で、絵画や文学、芸術や語学のお話などをメールで交換させていただくのがいつも楽しみだった。

今回、初めてお会いしたその方は、イメージ通りの穏やかで紳士的な方であった。語学に堪能で頭脳明晰な方であり、その深い知識を尽きることのない泉のように心の中に静かに持っていらっしゃるのだった。今回は特にドイツを中心に旅行されたとのことで、ブレーメンのご訪問の後フランスに入国され、ジャンヌ・ダルクゆかりの地であるオルレアン、そしてリヨンと、お忙しい日程の中スケジュールを調整していただき、お会いする機会を得ることが出来た。

リヨンは『星の王子様』の作者サン・テグジュペリの出身地として知られている。世界的に有名なこの作家の名

を冠した空港が存在するくらいであるから、リヨンの住人にとってサン・テグジュペリは英雄的存在なのだろうと思っていた。私たち日本人にとっての「星の王子様」が老若男女問わず愛される存在であるように。

サン・テグジュペリと星の王子様が仲良く肩を並べた銅像をベルクール広場の一角に見つけた。実をつけはじめたマロニエの樹の影に隠れるように佇む銅像。その前で写真を撮っている家族が一組。静かなものだった。早春の陽射しに照らされたリヨンの街を見守る作家と、隣に寄り添う星の王子様の像は、スターが楽屋裏でくつろいでいる様子を思わせた。戦争の終わったこの世界を、作家はどのような眼差しで見つめているのだろう。

ベルクール広場からほど遠くない場所、サン・テグジュペリの名を冠した通り沿いに作家の生家が見つかった。大学への往復で歩きなれた道のはずなのに見落としていたのだろう、地元のマダムに道を尋ねてやっとたどり着くという有様だった。

「星の王子様の作者・サン・テグジュペリ記念館」と題された看板が掲げられているでもなく、金メッキの銅像が置かれているでもなく、ただひっそりと、街の片隅にその建物は存在していた。仮にサン・テグジュペリが今でもこの街の住人で、そこから出入りして通りを歩いていたとしてもだれも驚かないだろうと思わせるようなさりげなさだった。

仰々しく飾り立てる必要など何もないのだ。そのような簡素さを、私はむしろ好ましく思った。友人もまた、静かにそこに

存在している銅像や生家の写真を大事そうにカメラに収めていた。

ちょうど短いバカンスに当たる時期で、三月上旬と思えないほどの陽気に恵まれ、透明な光と風の中を人々は楽しげに行き交っていた。旧市街地に位置するフルヴィエール大聖堂までの長い坂道を上り、美しい大聖堂のステンドグラスを眺め、瞑想するように歩き、私たちは日の暮れかけた街を後にした。

「慣れる」ということは、ある意味で感性が鈍るということなのかもしれない。見えているはずのものが見えなくなり、聞こえているはずの音が聞こえなくなる。

「この国、この街、この人のことなら良く知っている」と私たちが言う時、本当はそのことについて何も知らないのかもしれない。友人のリヨン訪問のおかげで、改めてこの街を新鮮な目で見つめなおすきっかけを与えていただいたように思う。

「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えない。かんじんなことは、目に見えないんだ」

とは、あまりにも有名な『星の王子様』の一節であるが、短くも真実を突いた名言だと思う。私達は未知の世界を恐れる生き物だ。慣れてしまえば、ガラスのような眼玉を開けっ放しにしているだけでも十分生きてゆける。けれど同時に、住み慣れた世界を後にして新しい空気を胸いっぱいに吸い込みたい、知らない街の色、音、香りを感じたい、見知らぬ人と話してみたい、前人未到の地を歩いてみたいと切望するのもまた、人間ではないだろうか。

毛布を抱いて泣きながら眠るには空が明るすぎ、過去を笑い飛ばすにはまだ早い。分厚いコートで身を守る必要はないけれど、肩で風を切って歩くには肌寒い。冷たい北風はもう吹かないけれど、明日のことは分からない。

空気が少しずつ柔らかくなり、木の実が一つ、また二つとふくらんでゆくように、静かに春を迎えよう。そのようなことを想うリヨンの早春である。

◆リヨン風信（四）◆

『記憶と蘇生』

中川莉羅

昨年の十月から始まった語学学校での授業の第一学期が今年一月末に終了した。なんとか試験にクリアし、ほっとしたのも束の間、かねてより申し込んでいた心理学研修に参加するため、ドルドーニュ地方へ足を運んだ。三年ほど前にフランス語の先生からお声掛けいただいたことがきっかけで、通信教育による心理学講座を日本で学んでいたのだが、リヨンに留学することになった大きな理由の一つとして、この勉強をもっと探求したいという動機があった。

フランス人の友人たちと相乗りで、リヨンから車で約五時間。山奥の民宿を借りての四日間の泊まり込み研修。運が良ければ野生の鹿に出くわすかもしれないという自然に恵まれた環境。スーパーマーケットで食材を買い込み、自炊しながら仲間達と楽しい時間を過ごした。

研修は朝九時から夕方六時まで。午前、昼休み、午後、とそれぞれ休憩時間を挟んで行われるとはいえ、正直に言うとかなりエネルギーを消耗した。フランス語での講義を理解することと、講義の内容を肚で理解することは全く異なる。前者は頭による知的分析作業だが、本当に大事なのは、ただ内容を追うだけではなく、実感として全身全霊で理解することなのだ。「講義を読むだけではだめだ、それを生きなければ意味がない」と、師匠からよく言われたものだった。今、その言葉の意味を遅まきながら実感している。

研修のテーマは、「意識と悪魔」。「悪魔」というとエクソシストめいていてなにやらおどろおどろしいが、怪しげなまじないや祈祷を行うわけではなく、「私達が真に幸福になるのを妨げているのは何なのか」、その正体を「悪魔」と仮に名付け、その原因を知るために行われた心理学研修であった。

私達は、幸せになりたいと望みながら現状に甘んじる。身を切るような風の中で一番星を見つけるより、かび臭い毛布の匂いのする安楽さを好む。誰にも言えない密かな願望を日記に書きつけては消し、また書いては消し、どうして前に進めないのだろうと泣きながら夜を過ごす。

「お前は我儘だ、他人の気持ちを考えなさい、そんなことを望むのは恥ずかしいことだ、みんな我慢しているんだ、お前だけが幸せになるなんて許されないことだ」

この言葉を聞かずに育った人間が何人いるだろう。幼いころは、その声は誰か別の人の声だったはずなのに、大人になるにつれ、それは自分自身の声だと錯覚するようになる。

「嫌だ嫌だ、私が望んでいるのはこれじゃない。本当に欲しいのはもっと別の何かなんだ！」泣き叫んだら必ず誰かから叱られるし嫌われるから、私達の無意識は、願望や欲望を抱くことを「悪」だとみなすようになる。心の中の花は萎れ、水を求め、干からびた大地を見つめて神様はなんて吝嗇なんだろうと嘆く。気を許せば悪魔はいつでもそこにいる。暗くじめじめした湿原地帯に。だから油断なく警戒していなければならない。悪魔に心を支配されないように。

―けれど、本当の悪魔とは一体誰なのだろう。誰にも姿を見られないように、嫌われないように、この世界で生き残れるようにと、躰に穴が開くほど自分を痛めつける「善人の自分」は、果たして本当に幸せをもたらしてくれるのだろうか。私達が「悪魔」だと思っていたものは、消しても消しても消えない叫びは、本当に「悪魔」なのだろうか。

「悪魔」の顔を見ることは恐ろしいことだ。その正体は人によって異なるらしい。研修では、一人一人師匠から名前を呼ばれ、どのような「悪魔」が心に潜んでいるのか、そしてその人の本来の魂の色は何色であるのか、解説していただいた。「完璧主義」という名の悪魔に憑りつかれ、生きる喜びを忘れた人。支配と束縛のゲームを愛情と思いこみ、愛を恐れて生きる人。「良き妻、良き母」という悪魔に支配され、本来の自分を見失ってしまった人。

生きることは競争だと教え込まれ、無価値感に苛まされ、生き残るために、自分の価値を証明するために闘い続ける人。

「悪魔」とは結局、記憶にしか過ぎないのではないか。「自分とはこのような人間である。なぜなら過去にこのような行為を行ったから」という無数の記憶の蓄積。誰かに言われた言葉。落第、失敗、失恋、病気、事故、無数の傷。目を背けたい過去を真正面から見つめ、自分の本当の願望を知った時、「悪魔」の叫び声は純粋な赤ん坊の泣き声に変わる。白が黒に、黒が白になり、オセロゲームの逆転が始まる。魂の牢獄から解放され、私達はようやく真実の姿を取り戻す。記憶が新たに塗り替えられ、白紙の心に新しい風が吹く。

二月からまた新学期が始まった。幸いなことに、クラス分けテストでは仲の良かった友人達とまた同じクラスになった。そして、新しい仕事が見つかった。毎週土曜日の午後一時から夜七時まで、とある語学学校にて、日本語クラスを担当させていただくことになった。フランス人の生徒さん達が日本文化に興味を持って、新しい言葉を覚えようと熱心に取り組んでくださっている様子に胸が熱くなる。

二千十九年早春。新しく生まれ変わる日々。きっと誰にとっても、何歳になっても、赤ん坊のような魂で生きることは出来るのではないか。そんなことを想うリヨンの二月である。

山奥の民宿を借りての四日間の泊まり込み研修

野生の鹿

Dordogne ドルドーニュ地方

◆リヨン風信（三）◆

門出

中川莉羅

年末年始の休みを利用して日本に帰省した。一番の目的は、生まれたばかりの甥っ子に会うためである。リヨンに留学してから三か月が過ぎ、東京の土を踏むのが新鮮に感じられた。寝ても覚めても自分がどこにいるのか分らず、躰は時空を超えて日本にいるのに、心はまだフランスを彷徨っている。幻の国の中で生きているような時間がしばらく続いた。

両親と共に姉夫婦宅に招かれ、甥っ子と顔を合わせた。生後一か月の赤ん坊を抱くのは生まれて初めてのことで、勝手が分らず、腰の引けた何とも情けない姿勢でおろおろと抱いた。生まれたばかりの赤ん坊とはいえ髪の毛は黒々としており、大人達が呼びかけると澄んだ瞳でじっと見つめ返してくる。母親にしがみつく小さな指、信頼しきって父親にしっかりと躰を委ねる様子。一つ一つの細胞はこんなにも小さいながら、生きようとする強い意志を感じた。この子の目に、この世界はどのように映っているのだろう。父、母、姉夫婦、私。不思議なもので、大人たちの存在は何一つ今までと変わっていないのに、新しい命が誕生したお陰で、お互いの存在をより身近に感じられるような気がした。

両親はいそいそと自宅と姉夫婦宅の往復を繰り返し、赤ん坊の面倒を見たり、家事を手伝ったり、若やいだように見える。あの子が笑った、眠っている時に思わず漏れる吐息が可愛らしい、将来はきっとハンサムな男の子になるだろうと、恋をするようにあの子の成長を見守るのだろう。

姉夫婦宅のマンションの裏手にあるみかん畑。階段を吹き抜ける風。ゆっくりと空を横切る雲。神のばらまく光の粒が見えるような気がした。私はきっとこの日のことを忘れないだろう。そして、新しく生まれたばかりの小さなあの子の記憶のほんの片隅にでも、楽しく過ごした時間の欠片がどこかに残ればいい。あの子にとって、世界は広く、豊かで、新しいままだ。

いつでも太陽に守られているような東京の冬と違い、ヨーロッパの冬は長く厳しい。一月のリヨンの平均気温は一・五度。日の出時刻は朝八時四十五分頃、日の入りは夕方五時頃。朝七時頃、家を出ると夜明け前の空に爪のような三日月

がぽつんと浮かんでいるのが見える。こちらの人々は体が強いのだろうか、摂氏零度の外気温でもコートの下は半袖、という人もいる。「だって部屋の中は暖房が効いていて暖かいから」というのが彼らの主張なのだが、それにしても、である(ちなみにフランス人の平均体温は三十七度)。

これに対して、一月の東京の平均最高気温は五・二度。それでもなお、東京にいた頃はコートの下にヒートテック、セーター、さらにホッカイロと重装備で歩いていた。日本人の平均体温は三十六・一度。体温三十七度といえば微熱である。少し躰が熱くなったような陶酔状態と言えるかもしれない。周りの景色がやけに美しく見え、陽気になり、歌を歌いたくなったり、普段なら決して口にしない悲しみや怒りを吐露してしまうような、熱に浮かされたような状態。そのような、日本人にとってはある意味で「異常な状態」も、こちらの人にとっては「当たり前」なのである。ラテン気質と言ってしまえばそれまでだが、彼らの躰に流れる血は、私達日本人のそれとは根本的に異なるように思えてならない。

フランス人は唐突である。ちょっと人と会う約束をするにしても、日本人ならば少なくとも一週間前くらいには約束を取り付けると思うが、フランス人はそうではない。

「ねえ、今日、空いてる?」と突然に人の予定を考えずに一日のスケジュールに割り込んでくる(もちろん、個人差はあると思うけれど)。ものすごい早口で話し、歩くのも速く、物事を決めるのもやめるのも五秒くらいで即断する。まるで早送りのビデオテープを観ているようだ、誰か字幕をつけてくれと、一体何度思ったことだろう。彼らのスピードに慣れるまで、毎日毎秒頭はフル回転である。こちらフランスに来てから、私の人生のスピードは三倍速くらいに回り始めたように思う。

だからというわけでもないのだが、私の引っ越しも唐突に決まった。知り合いのフランス人の紹介で、あれよあれよという間に話が進んだ。

以前住んでいたのは学生寮で、リヨンの地理も何も分らぬまま、ただ押し迫る留学の期日に追われるように、日本からインターネット上で探して契約したものだから、部屋の間取りや内装はもちろん、どの地区が安全か、大学との位置関係はどうなっているかなど、確認する余裕もなかった。こうして何も分らぬままたどり着いた最初の寮は、リヨン第三区のGuillotière(ギョティエール)界隈に位置していた。移民問題で苦しんでいるフランスの現状を物語るかのように、アラブ系移民の人々の多い地区だった。昼でも夜でも通りに人があふれており、煙草を求めて彷徨う人々、カフェに集って時間を潰す人々、山ほどの荷物をカートに押して歩く黒い肌の

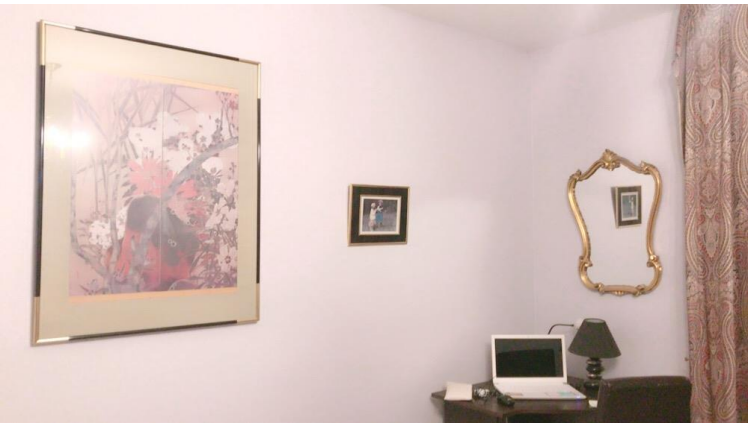
女性などであふれていた。彼らは何を求めてフランスに来たのだろうか。私がフランスに求めた光とは、また違う色のそれを、彼らは見つけたのだろうか。

現在私の住んでいるアパートは、リヨン第六区に位置している。「家に恋する」というのはこういうことを言うのだろうか。一目見たとたん、このアパートが気に入った。カトリック司教のジャック・ベニーニュ・ボシュエの名前を冠した通りに位置するこのアパートは、閑静な住宅地にあるため、部屋に入ると物音がほとんど聞こえない。しんと何かを待ち受けているか のような、ベルガモットの匂いの沈黙が漂っている。今が何時で、明日何時に出かけなければならないのか、授業に出るために何を用意しなければならないのか…慌ただしい頭の中身がとろり溶けていくように何も考えられなくなる。

大きな窓のある台所でお湯を沸かし、ハーブティーを飲む。教会の鐘の音が時おり聞こえる。家は住む人の心を表すと言うが、私の心がこの家のように、静謐であってほしいと願う。通りの喧騒から隔てられた聖域で、深く息をしている自分を感じる。この美しい家にふさわしい自分でありたい。ここに暮らし続けるために、なんだってしよう。こんな気持ちをある場所に対して抱いたのは、生まれて初めてのことだった。

日本で新しい命を授かった姉夫婦と、第二の人生に足を踏み出した両親のことを想う。幸せを求めることは罪ではないはずだ。扉を開けたら新しい風が吹く。遠くにいる戦友を想うように、大切な人々の幸せを願う。それぞれの人生が静かに輝き始める。

私のリヨンでの生活も、まだ始まったばかりである。



私の住んでいる部屋

近所の子ども用品店。

子ども服や赤ん坊用品の店に目が行くようになった。甥の三歳の誕生日には、このようなケーキを買ってあげたい。

甥。生後約一カ月の頃の写真。

市庁舎前広場

◆リヨン風信（二）◆

「光の祭典」

中川莉羅

十一月中旬からリヨンの街はクリスマスムードに包まれる。大通りに面した店では、クリスマスツリーに飾るオーナメントやチョコレートが売り出され、焼き栗を売る小さな赤い車が街のあちこちに現れる。ベルクール広場にはこの季節だけ特別に大観覧車が設置され、道行く人々はつい足を止める。ペラッシュ駅の広場にはリボンやミラーボールでデコレーションされた大きなツリーが堂々とそびえ、クリスマス・マーケットではホット・ワインとシナモンの甘い香りが漂い始める。都合の良いことに、私の通うリヨン・カトリック大学はこの広場のすぐ近くにある。灰色の空や冷たい雨にも関わらず、学校への往復の道が夢のように華やかなものに感じられる。

フランスでは、クリスマスは家庭的伝統行事である。キリスト教国のイメージが強いフランスだが、実際に教会に通っている信者の人口は驚くほど少ない。統計によると、国民人口の約七十％が洗礼を受けているにも関わらず、約四十％が無神論者であるとされている。フランスは、世界で四番目に神を信じない国であるらしい。振り返ってみると、フランス人の友人達との会話の中で「クリスマスは必ずミサに出席します」という熱心なクリスチャン的発言を聞いたことがない。では、彼らはクリスマスに何をするのかというと、家族や友人と過ごす人々が圧倒的多数である。都会に出て学業や仕事に励んでいる人も、この日ばかりはプレゼント片手にいそいそと帰省し、大切な家族と温かい料理をゆっくり味わう。

ちなみに、フランス料理は二千十年に「食の伝統」としてユネスコ無形文化財として指定された。クリスマスなどの特別な行事がなくても、毎週日曜日、家族や義理の両親と共に二時間、時には三時間に渡って食事を楽しむ。この事実一つを取ってみても、フランスの人々がいかに食事や家族との時間を大切にしているか伺える。ましてクリスマスの日なら、家庭の主婦が腕によりをかけるのは言うまでもあるまい。メニューは各家庭によって異なるようだが、食前、前菜、メインディッシュ、チーズやデザート、食後の飲み物というのが定番の流れのようだ。メインディッシュとしては、フォアグラ（foie gras）、牡蛎（huîtres）、スモークサーモン（saumon fumé）、去勢した雄鶏（chapon）。地方によっては兎やエスカルゴを食べる家庭もあるようだ。

美味しい食事の後、近況報告から始まり、仕事の話や政治談議に花を咲かせる。子供のいる家庭なら、サンタクロース（Père Noël）がパーティーの終盤に現れ、子供達にプレゼントを配る。家族を何よりも大切にするフランス人にとって、この日はキリスト生誕を祝う日であると同時に、何より愛する人々との時間を慈しむ日なのだ。十二月二十四日まで、騒がしいほど華々しかった街も、クリスマス当日は意外なほどしんと押し黙ってしまう。この静けさは、日本の正月を喚起させる。

クリスマスシーズンの賑わいもさることながら、十二月のリヨンを語るのに欠かせない伝統行事がある。リヨンでは、毎年十二月八日から十一日にかけて「光の祭典」（Fête des Lumières）が行われる。家々の窓という窓、通りに面したあらゆる店、公共建築物がライトアップされ、街をあげての盛大なフェスティバルとなる。中でも歴史的遺産として

指定されている、フルヴィエールの丘の大聖堂が光に彩られている様子は本当に見事である。

「光の祭典」の由来は諸説ある。ペストがアルプス以北の欧州で一三四八年から一三五三年に流行した際、リヨンの住民がフルヴィエールの丘の大聖堂のマリア像に祈りを捧げたところ、流行が治まったことに由来するという説。あるいは、一八五二、疫病から街を救った聖女像の完成予定日が九月八日から十二月八日に延期されたため、この日が「光の祭典」の起源日となったとする説。この日、リヨンの住民達は、聖女への感謝の念を示すためにロウソクを手にして集まり、街を練り歩いて聖女への感謝を捧げたという。それ以来、十二月八日はリヨンの住民にとって特別な意味を持つ日となった。

二〇一一年（平成二三年）の祭典には、この年の三月に日本で起きた東日本大震災からの復興を祈願しての行事が行われた。富山県南砺市福野町の福野夜高祭の夜高行燈がリヨンの街に招待され、三基の大・中行燈と二基の小行燈が「よいやさ、よいやさ」の威勢の良い声とともにリヨン市内を練り廻ったとのことである。

「光の祭典」には、リヨン市民だけではなく、各地から観光客が押し寄せる。おまけに、「ジレ・ジョーヌ（「黄色いベスト」の意）と呼ばれる市民団体によるデモと重なり、混雑が予想されるとのことだったので、少し早めに家を出て大聖堂の丘へと向かった。

すっかり暗くなった大聖堂への長い坂道を、蠟燭を手に登る人々の群れに出くわした。神の御言葉を大音量で語るスピーカーの後を、聖歌の復唱が追いかける。若者達のキリスト教離れが進んでいると聞いていたが、この国の人々の神を信じる根底的な信心は変わらないのではないか。

「ああ、これは単なる若者向けのミサだよ。光のパレードはここじゃない。行こう、行こう」と通り過ぎる人もいたが、身動きすることさえ許されぬような、何か圧倒的な力を感じて、私はただ、信心深い人々の群れが行き過ぎるのを見守っていた。

地元の人に言わせれば、ほんの数十年前までは、この日は各家庭の窓辺にロウソクを灯し、聖女に祈りを捧げるささやかな一日だったという。今のような街をあげての祭りとなったのは一九九九年のこと。二〇〇〇年の幕開け間近となったその日、盛大なライトアップが行われた。現在は会期も長期化し、四日間にわたってリヨンの街が照らし出される。

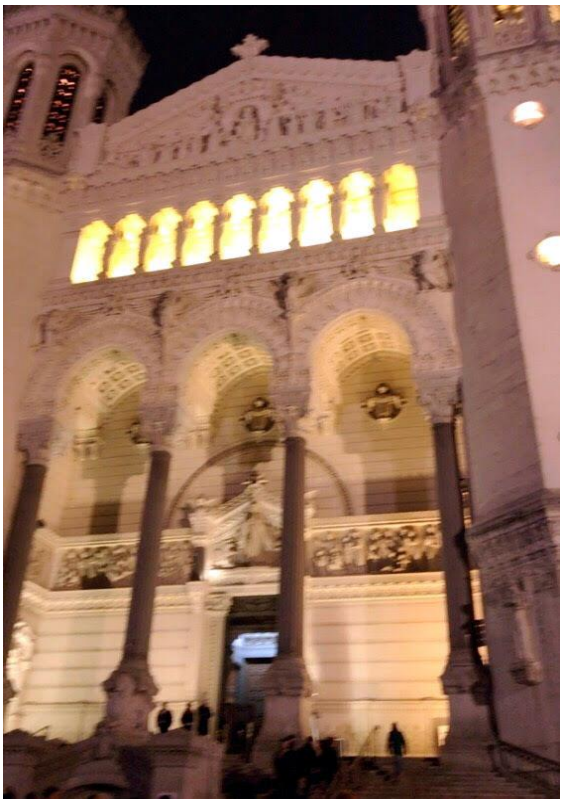
何というのだろう、「光の祭典」の当日は街全体が巨大なディズニーランドと化したようだった。あちこちで繰り広げられる光のマジック、ホットワインやココアを売るスタンド

から聞こえる威勢のいい掛け声、通りを笑いさざめきながら歩く人々の香水の匂い、様々な言語、人種。灰色の空の下、誰もが急ぎ足に通り過ぎる憂鬱な平日の朝のリヨンとはまるで別の街のようだ。

それにしても、この国の人々は楽しむことが本当に好きなようだ。旧市街地の壁に映し出される光と音楽のスペクタクルに、ブラボーと叫ぶ人、口笛を吹く人、チカチカ光る蛍光バンドを頭に巻き、写真や動画を撮る人、綿飴を食べる小さな子供を肩車する人。彼らの血の中に、本能的にお祭り騒ぎを求めるような何かが脈々と受け継がれているのではないだろうか。そして、私は彼らの陽気な気質に憧れる。フランス人は太陽のように明るい人種だとは思わないが、悲しみも歓びも、苦悩も皮肉な笑いも、「人間であること」として丸ごと受け入れている、そのような印象を受ける。

信心深い蝋燭の光も、華やかな光のパレードも、人々の心の中にある最も真摯な願いを照らし出す。私はこの国に来て、以前よりも自由で幸福になっただろうかと、ずっと胸の中で繰り返してきた問いが再び浮かび上がる。答えはまだ分からない。

学期末試験に光の祭典、家族や友人と過ごす賑やかな食卓、クリスマス…と、リヨンの冬は慌ただしくも楽しく過ぎてゆく。この土地に来た歓びも寂しさも、理由のない懐かしさも愛おしさも、すべて光の渦に巻き込まれた目映い冬であった。



バジリック大聖堂

クリスマスツリー

光の泉

光のショー

◆リヨン風信（一）◆

名もなき優しさ

中川莉羅

リヨンはフランスの南東部に位置する。「星の王子様」の著者であるサン・テグジュペリの出身地として知られ、この作家の名を冠した空港がある。リヨンはまた、フランス第二の都市と称され、美食と絹織物の産地としても有名である。北東から流れ込むローヌ川と、北から流れ込むソーヌ川がリヨンの南部で合流する。ソーヌ川の西側は石畳の街並みの残る旧市街で、これはユネスコの世界遺産（文化遺産）に登録されている。

労を厭わぬのなら、ロープウェイを使わず、あえて徒歩でフルヴィエールの丘を登るのもよいかと思う。丘を登り切ると展望が開け、リヨンの街を遥かに見渡すサン・ジャン大聖堂に辿り着く。この大聖堂は十二世紀に建てられたもので、以降何度か変更が加えられているものの、ゴシック風の重厚な外観と内部の壮麗なステンドグラスは美しく保存され、今も変わらず人々に安寧を与える神の地である。年中無料で開放しているというのだから、その懐の深さ推して知るべし。

私個人は、純粋なキリスト教徒とは言い難いのだが、カトリックの教育を受けた影響もあり、大聖堂にいると不思議と心が澄んでくる。観光客の声が柔らかにこだまし、天井にはイエス・キリストが精霊に守られ微笑んでいる。人間としての自分を忘れて、いつまでもこの神の家に留まっていたくなる。しかし人間である以上、やれ空腹だの、足が痛いだの、体の制限があるのはやむを得ない。しぶしぶ下界に戻ることにする。

一方、ローヌ川の東側は、近代的な建物が並ぶ地域である。リヨン出身の建築家としては、トニー・ガルニエが有名である。近代的都市計画理論「工業都市」を推進したのだが、彼の作品をモダンで斬新だと感じるか、伝統的な美しい街並みを乱すものと感じるかは、見る者の感性によるだろう。

リヨンは住みやすい街かどうかと問われたら、私はイエスと答える。パリほど大きくはないが、街並みは美しく、

トラム（路面電車）や地下鉄、バスが街を縦横に走り、交通の便がいい。物価もそれほど高くなく、五ユーロ（日本円で約六百五十円）もあれば、美味しいパンにチーズ、葡萄が手に入る。

何より、リヨンの人々は驚くほど優しい。「フランス人は冷たい」というイメージを持たれる方は多いかもしれないが、ここリヨンでは、そのような概念が覆されること必須である。重い荷物を持っていたら、「手伝いましょう」と手を貸してくれる人がいる。道に迷っていたら、こちらが何も言わずとも地図を確認して道を教えてくれる人がいる。こちらが日本人だからか、お金目的で近づいてきたのかと、一瞬警戒するのだが、そのような考えを抱くことが恥ずかしくなるくらい、皆、爽やかに善行を行い、さっと去る。国籍や性別を問わず、人間が人間として大事にしてもらえる…。当たり前かもしれないが、そのような当然のことが異邦人としての我が身に染みわたる。

先日、このような事があった。スーパーマーケットに買い物に行った際、たまたま持ち合わせが足りないことに気付き、購入予定の品物をレジで急遽キャンセルしなければならなかった。といっても大したものではない。人工甘味料のタブレットで、一.九ユーロ（日本円で約二百五十円）。嫌な顔をされるかと思いきや、店員の方は愛想よく対応してくださり、ビニール袋が必要かどうか尋ねてくださった（ちなみに、環境保護対策のため、この国ではビニール袋も有料である）。ものすごい速さで残りの品物を袋に入れ、その男性はにっこりと微笑んで品物を渡してくださった。感じのいい、素敵な笑顔だった。

帰宅後、袋から品物を取り出してみて驚いたことには、購入した野菜やヨーグルトに紛れて、あの人工甘味料のタブレットがそこにあるではないか！　一瞬、店員の方が間違えたのかと思ったが、ビニール袋にものすごい勢いで品物を入れていたあのテキパキとした様子を思い出すに、そのような初歩的なミスをする人のようには見受けられなかった。（ま、いっか。おまけしてくれたのだな。）

根が単純な私はそう信じることにして、その品物を戸棚の奥にそっとしまった。

移民問題や失業者の増加など、この国で生きる苦しみはもちろん存在するだろうと思う。それは、日本の問題とはまた異質のものであるだろう。けれど、この世界は悪意に満ちた場所ではない。また明日も、生きてみてもいいかもしれない、そう思えた。

リヨンという街は、見知らぬ人の名もなき優しさで満ちている。そして私は、その優しさに確実に生かされている。

大聖堂の内部

フォルビエールの丘の
バジリック大聖堂

リヨンの夜景

「光の祭典」当日の街の様子。
観光客でごった返す